天竺行路次所見

北畠道龍師著述

三

和装本

ル 7
3353
3

門 凡1
號 3353
卷 3

早稲田大學圖書館
昭25.3.7
購入

北畠道天竺行路次所見卷三

北畠道龍師 門人 西河偏稱
長岡洗心 筆受

北畠道龍師口述

伊太利國の「ブリンジーゼ」港より印度ゑ發せ

十月二十五日午前第四時「ブリンジーゼ」港より「モンゴリー」號の英艦ゑ投じて印度ゑ發航せ此の日天氣牢晴些少の風波も无く海上宛も一面の砥よりも尚不平易ふして左の方ゑい希臘の群山遥ゑ我れを揖せるが如く右の方ゑい伊國の沿岸近く我れを戀ふが如く我れとても亦さ久しく住み馴し歐洲ゑを

む坐ま別を惜む心の切ふる无んや去りとて艦の行くこと速らなれど午后第五時頃まい希臘伊太利の山々も淡乎たる一黛の雲煙と化し殆んど将さま中海ま至らんとをる也嗚呼我れ曾て本邦を發して より以来今日程ど満腔の爽快を領せしことを之れ无き也如何んとゐきば我れ世界歴撿の事業ハ既ま上ま終りて唯だ是れ此の印度行の一つを缺く而已然して此の行たるや我が邦建國以来能く之れを果して得たる者楽門中未ざ一人も是れ有らざる也然るを我れ一度印度ふ入て先づ佛尊の墓蹟を偵尋し及び佛后遺教の轉次を詳明して我ぞ佛教改正の備原ふも致し度き素志ありしぞ今日此の行ま就て此の素志を果さんとをる豈ま満腔の爽快ふ非ざるを得んや

二十六日今日も亦さ天氣牢晴ふして右の方まい伊國の連山い既ま遠く煙化し去りたれども左の方まい希臘の群山ハ尚ホ薄く一帯の黛の如く悠々たり」

二十七日今日ハ希臘の薄黛も全く消し去て四望雲涯中海茫々たり

二十八日午前第九時「ポートサイド」港ま着セ

二十九日此の八九兩日間は世界有名なる「シュエツ、カナール」の八十八里（英の「マイル」）の堀り切りを通り抜けて三十日午前第八時頃「シュエツ」港に到着したり同日午前第十一時同港を發し是より亞刺伯海路は懸り右は埃土左は亞刺伯國を眺顧して行くこと四晝夜なり

十一月四日朝第四時遂に「アデン」港に達したり

五日午前第五時同港を發して之を直線に前に進めば亞細亞の新和蘭の方へ行く也然るを之れを左に轉じて印度海に浮ぶ也「カビテイン」云く此の海や恒に平易ふして激浪を起さこと无しと云へども炎熱の苦き恒に此の如きも也と即今い十一月五日ふして其の暑氣の太だしき我が日本の大暑よりも尚ほ甚だしき（單衣にして尚ほ暑し）を感ゆる也是より東北の隅に針路を定めて行くこと七晝夜にして同く十一日午前第九時頃西印度の綱買港に達し「アデレッフ」と云ふ西洋形の旅宿に投笈せる也

印度略史

抑も印度の邦たるや「ダライ、エッキス」とて三角形の邦にして其の國尖い南の方た赤道の北緯八度より

起りて其の國尾ハ北の方た三十四度ヨ至て止む也（此の長さ地理家皆ゑ云く六千里ありと）然して其の國尾ハ西と東ヨ張り出し（此の濶さ地理家或ハ云く六千里ありと）北ハ西藏國と喜馬拉山脈を以て之き界して其の國尖たる南ヨ走る程尖りて究も埃土の「ピラミート」の尖の如くヨして印度洋ゑ突出そる也又た其の東ハ旁葛剌洋を中ヨして其の洋東ヨ緬甸及び「ミラア」等の邦あり又た其の西ハ印度洋を中ヨして「ベリウスタンズ」「アブガニスタン」及び亞剌伯等の邦あり然して此の印度の大初を云へバ「シリッセル」（萬國史を書ひたる人）及び「オルデンブルヒ」（印度史を書ひさる人）等云く原と「アルト、ヤーレ」（上古代）の昔ヨ印度草莽の時「ホフ、アジア」（高地の亞細亞と云ふこと）即ち蒙古及び「カウカジーセン」等の人民が水草を追ふて段々ヨ西ヨ遂ヨ喜馬拉山の西北の凹より北印度ヨ入り彼の有名ゑる鉛絶斯（此の大河ハ其の水源西藏より出でハ印度を横切りふして西より東印度の甲谷陀府を經て旁葛剌洋ヨ入る也）と温都斯（此の大河ハ其の水源喜馬拉山中より出でハ西印度と皮路直坦との間だを經て西印度洋ヨ入る也）との二大

河の有るを見て衆欣然として云く此の如き二大河の在る有るを以て大ひに邦を可きに足る也とて其れより堤に草の殖へたる如く先づ此の二大河に沿ふて「アルメリヒ」と段々に「ウオヌング」(住居)と開き遂に此の地を画して五印度と爲すに至りし也「オルデンブルヒ」氏云く此の印度人の大原を云へば「ホフ、アジア」人が鉛絶斯河の邊へ入り來り此の邦を為せし其の上古は我々の邦に殘りある所の印度の古詩(リグウエダ)と云ふ詩に依て見ると何れ丈け古きことゝ云ふことは分らぬ故に印度人に於ても其の我が邦の大原を忘れさることは即ち希臘人や及び伊太利人の我が邦の大原は何所ゝら興りしやを忘れし如く忘れさり然るに「ウエダ」の詩に依て見ると原と「ホフ、アジア」人の印度に入り込みしや其の法律も元き黒き人民を殺したり追ふさり又た屬せ令めたりして温都斯河と鉛絶斯河の邊に来りし其の中鉛絶斯河と「ヤムナ」河の相ひ合せし所に来りし「アンガ」「マカダ」「ビラハ」「カッシ」「ユサラ」等の人種が東印度の方へ出ろけし者と見へる也然るに他の邦の人種は散々に印度へ入り込みしなれども「アリア」人の如きは一塊と

なりて宛も大濤の来るが如く入り込み先づ温都斯の河邊なる「ペンチャフ」(印度の入り口ち)と云ふ邦は住みゝ也此の人種ハ外ゝの人種と違ふて最も大ふある文明を以て来りし也如何となれバ此の人種が彼の有名なる「リグウヱダ」の詩を制作したる人なればも然して此の人種が東南鉛絶斯の方た「ヤムナ」河の合そる邊は進んで是は於て「ブラマ」聖人の邦と云ふ書と及び「ブラマ」百道言と云ふ書を制作さきたり其の中ゝの規則書は云く凡そ地球上は生れさる人たる者ハ此の「ブラマ」子ンゐら修身の教ゑを受けねバならぬと定めらきたり是れ此の「ブラマ」教が他日種々(「ペッシイスモス」「ナスケタシ」「ナスケタス」「アスケチック」「ゾフイスチック」等の種類あり今之れを爰ふ説明そるふ邊あらざる也)は分ゝきて大ひは印度の文明を争わ令めさりと(以上ハ「オルデンブルヒ」氏の印度史は云ふ所なり)龍云く是き此の「ブラマ」教ふる者ハ釋尊出誕前は至るまでハ既は九十五種と分れて是れ此の九十五種が亦さ分れて二となる一ハ「イデアールイスモス」の有の見の部(數論)「ブラマ」が人と世界を二十五諦は分けて立つ即ち金七十論あり)

又と一い「マテリヤールイスモス」死の見の部（勝論「ブラマ」が人と世界を十句に分けて立つ即ち十句義論あり）にして此の二部互に確然として爭ふて少しも止むこと无かりし所釋尊此の間に出で、印度「ヒロソフィー」の真意を以て彼の有无兩部の「ブラマ」を質正せるに何れも之れに答ふること能わざりし故に釋尊莞爾ふて云く然らば則ち汝等が有と云ふ者も真有に非ざる可し又と汝等が无と云ふも真无に非ざる可しとて大ひに印度「ヒロソフィー」の真意を開顯せられし所之れが為めに衆論の挫折せらるゝと

と宛も枯れを拂ふが如く皆な悉く舌を結んで門下に伏せ即ち其の最も巨擘なる者い舍利弗阿難（原と「ブラマ」の大家）の十大弟子等是れ也是に於て釋迦蓋世の卓見印度の「ヒロソフィー」を振然として奥起し大ひに天下の文明を發揚せられさる也嗚呼印度文明の隆盛なる前后此の時を以て第一とせる也是れ此の文明西の方埃土に行き羅甸希臘に亘り遂に歐洲を拔けて亞米利加に入る也（是れ即ち「シリツセル」の萬國史に云云せり）又と其の東の方い亞細亞洲中を經過して支那に行き遂に我が日本に来る（開元釋教録等

ま云云せり）實ま世界文明の「プアテル、ランド」（父の邦）と云ふこと）と云ふ可き也然るま物換り星移りて佛后五百年の頃佛徒の稍や怠りたるま中りて「ブラマ」教が復た再び興て印度の教権更ふ「ブラマ」徒の手ま落ちし也其れより以来ま印度の文明日々ま頽壊し國力漸次ま靡敗して殆ど之れを如何んともせること　と兎きま至らんとせるの間ま乗じて葡萄呼人佛蘭西人等も印度ま入て各々其の爲を所あらんとせるの際一千七百五十六年の頃英國の有名ふる「ヘスチング」氏ハ東印度の甲谷陀ま入り同く有名ふる英國の「プライブ」氏ハ南印度の馬搭嘶ふ入りイ以來た英國の遠政手段又た大ひふ行われんとせるふ及でや佛人の如きハ特ふ百方之れを妬害せと云へども「ヘスチング」及ひ「クライブ」二氏の小節拘わるふ足らざるの深謀偉略を以て抗せる者ハ皆な之れを誅夷し服せる者ハ悉く之れを拊循して今より百二三十年前哀れむ可し印度全國の版圖全く英國の所領となる也龍之れを考ふるふ印度の爰ふ至る豈ふ獨り天子政府の兎識兎氣力ふ因る而已ならんや亦た是れ二億五千萬人の兎識兎氣力ふ因るや素とより也

嗟呼人氏たる者亦た深く鑑を可き哉龍更ふ「ロジッカリセ」(因明論法)を以て之れを云へば印度此の如く頽壞谷まると云へども英國此の如く遠政巧みなりと云へども若し「ヘスチング」及ひ「クライブ」の二氏微せば英國印度果して此の如き今日有ることを得んや必竟兩國の今日有るハ此の二氏の有るを以て也扨て英國の此の二氏ありて此の事の成りしを之れを且く「ロジッカリセ」(因明立ち)ふ云へば譬へば梅田の觀梅の如し梅も梅まして人ふ非ず人も人あ〜て梅ふ非を然し其の梅ふ非ざる人を以て人ふ非さる梅と一つ(因明論の不相離性)ふ用く所ふ於て梅田の觀梅と云ふことが出来る也然し人(客)が行て梅(主)が發ひたるに非ず梅が發ひて人が行て觀梅するなきば觀梅の大原も先ず梅ふ在ることと素よりの事實なる二氏と英國との間だふ於て其の遠政の成りしハ此の二物の相ひ依る所ふ在りとも云へども全く二氏の力ふ在る知る可き也傳ふ云く人を得れば其の事舉るとい此の謂歟嗟呼我が日本の將來大機ふ就てもつゞまり欲ひ者ハ人なる哉

印度ふ入るの路次

古昔唐の時代天竺ふ至るふ其の路二つ有り一ハ即ち長安より隴西ふ出で玉門陽関を經て流沙を渉り南山ふ沿ふて西し葱嶺を越へて北天竺ふ至る也又那晋の代ふ法顯恵生等の北天竺ふ至る皆ふ此の路ふ依る也故ふ唐書地理志ふ云く安西の西關を出づる數千里ふして疏勒を渡りて葱嶺ふ至る等と云々又た一た長安より蜀ふ入り罹越を過きて東天竺ふ至ると故ふ唐書地理志ふ云西の方永昌故郡ふ至るふと三百里又た怒江を渡り諸葛亮城ふ至り驃國境ふ入り(今の緬甸)西の方黒山を渡り東天竺ふ至る凡そ六千里許り有り等と然るふ其の蜀より羅越を經て行く路も近しと云へとも甚た嶮難なる又た隴西玉門ふ出るの路ハ遠しと云へども少しく平易の故ふ支那より天竺ふ入るの數名槩して皆ふ此の路ふ依る也然し乍ら是れ此の二路ハ何れも皆な嶮呼遼遠ふして智識豪膽兼具の人ふ非ざるハ果して行くこと能はざる也然るふ文明の今日ふ於てハ「ダンプシップ」(蒸艙艦)の東行西趨所として至らざること无きの秋なれど若し水路より行くときハ甲谷陀馬搭嘶(是れ等ハ東印度有名の港なり)及び鋼買(是れハ西

印度の有名なる港ゐり）等の諸港何れの地からでも容易ゐ至り得可きゐれども今日まてい支那日本の間ゐ於てさゑどの楽門も死ぎバよ〜や又た印度ゑ至り得るも佛蹟の踪もるゐ足る可き者も死く唯だ英人の土人を叱咤する苛政の太だ甚ざ〜きを見るの外り他死き也嗟呼印度の不幸何為ぞ爰ゐ至れる實ゐ哀む可きの至りゐ非ずや

日本の楽門印度ゐ入る果して誰れの矯矢とする

日本開闢以來楽門中印度ゐ入らんとする者北畠道龍を以て楽一矯矢とする甚ざ然らざる也如何んと

なきむ諸君知らずや平城天皇第二の皇子高岳親王弘仁元年の事ゐ際して太子の位を退き同く十二年遂ゐ削髪染衣して真如と號し東寺ゑ行き道詮ゑ從ふて三論の深義を叩き又た空海ゑ就て真言の密意を受け遂ゐ阿闍梨と成り貞觀四年蒭僧宗叡を隨へて入唐し支那ゐ留笈すること殆んど二十年ゑ垂んとする也此の時中宗皇帝廢佛の后ゐして佛教頗る衰薾し佛業亦た振わず是を以て親王抽然として自ら以為く如かず直ちゐ印度ゐ行て我が佛尊の法源を求めんゐもと更ゑ支那を發して印度ゐ向ひ玉ふ

于時年し我か陽成天皇元慶五年ふして唐の僖宗皇帝中和元年ふ當る也嗚呼、親王た我ゞ日本建國以來求法家第一の豪傑ふして弘法傳教等の支那ふ行て以て自ら足れりとするの類ふ非ざる也然るふ三代實録陽成天皇元慶五年の紀唐書地理志等ふ依りて之れを見るときハ印度行ふ二路ある中ゝ親王ハ北道ふ依らぞして東道より羅越を經て怒江を渡られし也然るふ路ち漸く進んで流沙河の邊ふ至りしよ豈ふ計んや猛虎の為めふ害せらを遂ふ薨じ王ひを と也即ち陽成天皇元慶五年の紀ふ親王ハ羅越ふ至り流沙を渡らんとして薨ぞと云ひ又さ日本皇子傳よた親王遂よ虎の爲めよ害せられると有る也嗚呼、其れ親王ハ日本開闢以來印度よ向ふて法源を求めんとたる第一矯矢と云ふ可き也惜ひ哉其の本志を中途よ廢弃して玉ふこと是れよ依て之れを云へバ龍が如き者ハ即ち是を求法第二の人と云ふ可き也然るよ彼れた不幸ふして中途よ之きを廢して我きた幸ひよして遂よ其の素志を果させ而已よ非ぞ亦さ彼の第一求法家の志しをも兼達して初めて日本求法の大榮を舉ることを得さり龍ゞ天幸豈よ些少な

らんや

鋼買港「アデレッフェ」氏の話

上に述べし如く十一月四日午前第九時西印度の鋼買港の「アデレッフェ」旅宿に投笈せしが其の主人の名を「アデレッフェ」と云ふが故に其の宿を名けて「アデレッフェ」と云ふも扨て翌五日は案内者を雇ひ鋼買都府を巡覽せるに土人街を實に醜卑衰廢相ひ谷まりたれども英人の寄留地を見れば莊大嚴麗にして之れを見る計りでさる宜なる哉英國の為めに遂に御せらるゝこと實に悲慨の至りに非ずや此の主人

「アデレッフェ」なる人は即ち印度人にして幸ひに英語を能くせ加之ならぬ印度の歴史を知ると云ふを以て即ち此の人に依りて印度古来の事實を歴史上に聞き又た即今内地の變轉せる實況を糺り調ぶるならば先づ槩數を知れるでも有ふと考へし故に其の譯を申し入れ依頼せし所主人が我々に向ふて全体貴君方は何ぞの邦の人なるぞと尋ねられし故に我々は「イヤッパンニース」(日本人と云ふこと)と答へし所主人の云わるゝまは是れまで日本からは頗と人の来らぬ邦ぢやが其れは實に珍らしき邦の人

人なり然るに何んの為に此の印度へ来り玉ふや
そこで余(龍自ら云ふ)答て云くされどとよ我れハ日
本の旅僧にして即ち釋迦如来の大教を信奉する者
ぞゝ貴君ハ定めてゴ承知でも有ふが古来支那よ
り此の印度ゑ參れ人々ハ數多有りと云へども我
が日本の棄門さる者此の印度ゑ来り者未ざ曾て
一人も是れ有らざる也然るに即今我が日本を初め
亞細亞地方の佛教を見るに邦として衰壊せざるハ
无し其の上其の本國たる此の印度に於ても亦さ久
し佛教ハ敗頽せりと聞く若し果して然らバ實に

慨然の至りに非ぞや抑も佛教と云ふ者ハ佛教實体
に於て敢て興廢を為す者に非ず其の興廢を為す所
以んの者ハ全く是れ之を維持する者の手の如何
んに在ること素より之れを知ると云へども然し乍
ら先づ此の印度に入りて此の佛教の衰壊せし手續
きを詳らに采り調べ其の上歐洲宗教の隆盛(歐洲宗
教の興廢をる所以んハ既に前年歐洲に入りて之れ
を采り調べたり)なる手續きと比見して大ひに佛教
の再興を計んと思ふ心にて遥々爰に来りし也其の
上ゑ若しや釋迦佛尊の墳墓の今に存在し玉ふなら

バ責てハ我ゞ人民の總代とありて一度び拜至を遂げ參らせ幾〳〵久〳〵き教への鴻恩をも謝〳〵奉り度く思ふて来り〳〵なゝバ庶幾〳〵ハ貴氏我ゝを補けて此の素志を果たさせ玉へゝ〳〵と懇ゝ依頼せ〳〵ゝバ主人云く扨てゝ貴君ゝ我ゞ本國の佛教を信奉〳〵て遥〻爰ゝ来り玉ふの始終を承り如何ゝも感泣の至りゝ堪へさる也我れ等も本國のことなれど佛教の廢頽ハ如何計り悲まざるゝハ非ざれども時勢既ゝ此の如〳〵我れ等一孤の力らとてゝ之れを如何んとも せることゝ能ゝざれど徒ゝ今日までハ暮せ〳〵也然るに貴君ハ他國の人で有り乍らゝほどまで此の佛教の廢頽を悲み玉ふゝ實ゝ愧ぢ入りたることぞゝ〳〵此の上ゝハ責めてハ貴君の素志を果し〳〵玉ふ一分ゝりとも補け參らゝ可し何なりとも心得たる丈けのことゝ力ゝなり申ゝ可し遠慮ふく尋ね玉へゝ〳〵然し乍ら釋尊の墳墓の如きハ殆ど二千五六百年の日丈を經たれゝ其の痕と殆ど踪ゝ可らざる也我れ等五十歳の今日ふ至るまで隨分心懸けざるふハ非ざれども其の何れゝ在ると云ふことゝ未ざ之れを聞のざる也我れ等人民の墳墓とてゝ千年も尚ゝ遺

存する者有ること疑ひなし況や二千五六百年を經過せる佛墓追尋のこと い實に思ひを絶ち玉へかしと云われ〳〵也其れより七晝夜の間だ日々「アデレフヱ」氏の話を聞き大ひに發明する所少なからざる也其の詳細ハ我が別記に在きび追々述を可き也

余前日に歐洲を歴巡せしとき獨逸に於て「サンスクリット」(梵學)「プロフヱシヨル」「オルデンブルヒ」(印度に在學すること三年と云ふ)氏又と露西亞の同く「プロフヱシヨル」「ペトペーフバトリツチヱ」(印度に留學とすること二年半と云ふ也)氏及び即今世界第一と云われる英國の「オクスホルト」の大學校の「サンスクリット、プロフヱシヨル、マクスミルレル」氏等に面をるごとく釋氏の墳墓を何きに在りやと尋ねしに「オルデンブルヒ、ペトペーフ、バトリツチヱ」の二氏の云わるゝハ我れ等在印中百方之れを偵尋せしかども佛墓の所在ハ遂に知れざりしと又と「マクスミルレル」氏云く我きハ未だ印度に參らざれども多年印度學に從事し居る故に佛墓の何れに在るやを吟味をることと實に之きを勤めたりと云へども未だ其の有无を決をること能わざる也とて何れも皆な墳

墓ハとても偵尋を可のらぞと云われしも也今此の土人「アデレッフエ」氏の話尚不然るときを到底偵尋をるの難しと云ふことハ思ひ合せて徵せらるる也」扨て鋼買ハ留在をること既ハ七日「アデレッフエ」氏の話も緊數之れを聞き取りたるども何を申をも教法學ハ於ても素人のことなれど宗教上ハ就ての真の實際ハ詳明なり難けるバ爰ハ先づ去る可しと思惟しけれど余「アデレッフエ」氏ハ向ふて云く全く貴氏の高庇ハ依りて印度内地の事實略不其の緊數を得たれど我れ等是れより内地ハ入るの針方之をハ

過ぎたる嘉貺ハ无き也其れハ就て明日ハ一と先づ此の地を發せんとを抑も内地ハ入るハ何れハ路を采るを便とをるやと尋ねけるに主人の云く之をより内地(中天竺)ハ入るハ二路有り即ち一路を右の方「パンウエル」より「ポナー」ハ出でゝ中國(中天竺)ハ行く路有り又と一路ハ左の方「コルリアー子」より「ナッシック」ハ出でゝ北天竺ハ至り然して后ち中國ハ行く路ち有り然るハ右ぎ「パンウエル」の方ハ其の路近しと云へども太と嶮難ハして或ハ草賊の人を害をる少なからぞ其の上ハ猛獸毒蛇の害「アデレッフエ」

氏云〳〵凡そ五天竺の人民年々この獸蛇の為めに害せらる〳〵者殆ど七八百人に及ぶ實に如何んともせ可らざる國難なり)ありて往々其の害に罹る者亦た太ぞ少なからざれば此の通路の如きハ土人尚ホ之きを難んぜ況や他邦の人ふ〳〵てを中々通行困難なれぞ思ひ止り玉へ〻〳〵と又さ左り「ガルリアー子」より「ナツレック」の方い太だ迂路なれども此の行路の如きハさホど困難も多からざれぞ庶幾ハ此の路より行き玉へ〻〳〵と云われ〳〵故に即ち同氏の教ゑの如く左り「ガルリアー子」より發をること、決〳〵る也

同十七日午后第七時三十分鋼買港の「バイクラヤ」と云ふ「ステーシヨン」より舩車ふ乘り即ち左の方「ガルリアー子」の行路に向ひたり即ち車中路傍の村々を點見せるに其の人民の居住たる宛も曾て實見せし露西亞の村々民居の卑醜矮陋なると少〳〵も變ることと兎く之きに比それぞ我が日本の山里に住み古びたる百姓の家居こそ余程ど上等(是れまで世界中を歷見せしに何に一つ日本の勝きさと思ひ〳〵こと一つも兎〻〻りに天竺に来りて初めて此の音あり天竺の委靡思ひ合せ可し)なりと感ぜられさり

又た或ハ其の四方を見渡せバ曠野の茫渺として其の遠涯を究むること能わざる者ありて（此の野の幅員宛も日本全國位ひの大さ程ありと思わる）其の地頗る乾燥ふして殆ど沙漠と其の雄を争わんとする沙色ふして其の呼々ま躑躅や五月木の如き木ゞ河原蓬の濱邊まころ〳〵したる如くころび植まころついて有るを見るの外ゝ樹木とてハ更ま之れを見ることと无き也然〳〵て其の往々在る所の石面を見るま皆な悉く黒く燒て宛も火事場の跡の石の如し之れを以て天竺の暑さを測り知り玉ふ可きも

午后第一時頃鐵路悠々殆ど倦怠の思ひをなし居て し所車中の丁夫（此の丁夫ハ頗る英語を能くを）來て慰して云く長路悠々たり定めて倦厭ふ耐ゑ玉ふざる可し我れ且く諸君の為めふ天竺旅行の慨心す可きを述ぶ可し抑も此の天竺の國たるや即今ふても國力大ひふ冷落して民庶太た貧黠なり是を以て草賊細盗山野幽僻の間ふ出没して時々行旅を砲害して其の槖装を掠却をるありて内外の人々此の害ふ罹る者太だ少なゝらざる也諸君ハ遠方の旅客深く慨心せざる可からざる也其の上ゑ殊ふ慨む可きハ

此の鐵道線の大賊あり此の賊や百人或ハ百何十人各々馬ふ跨り銃を持し夜間ふ乗じて此の鐵路の脈線を抜き去り艙車をして粘著拘止せ令めて直ちふ其の乗客を砲撃鏖殺して一人を剩を所无く悉く其の旅装を掠奪して去る宛も忽として煙の消するが如く其の痕實ふ踪を可からざる也嗟呼曠野邈々たり印度政府と云へども之れを如何んともする能わずと聞く其の狠戾慘虐の太き實ふ名狀す可からざる也此の賊や六七年の間だふた或ハ一度び發現して大ひふ通行の人民を害するふと有る也是を即ち鐵道通行の人の深く戒懼す可き所なり蓋し竊賊のあらざる邦も之れ无しと云へども印度の如く此の賊の最も多き邦を亦た有らざるかと是れふ依て之れを云へば印度の冷落實ふ徴するふ足るなりと云云龍云く邦の頽廢意外の不幸を生ぜ鑑す可き哉

鐵道漸く進んで往々村落の有るを見るふ馬牛の休憩をる者十の中か六七匹ハ皆な河中ふ沈卧して首丈け出して居る有り即今ハ十一月の十七八日ふして世界一般何れの邦ふ於ても仲冬にして時候太だ寒烈なり然るふ印度の馬牛此の如きの休憩を為を

我も等世界中の大數ハ歴經せしのども此の如きの奇觀ハ未だ曾て之れを見ざる所なり嗟呼世界萬象の異同ハ温度の強弱ニ依て然る者とハ云ひ乍ら餘りの奇觀なるゞ故ニ爰ニ記をる而已印度の熱國さる推して知る可し是れより經る所の村々等實ニ記するニ遑ま有らざる也

十九日午前第六時漸く北印度の「アルハベト」府ニ達し即ち「アルハベトホテル」と云ふ旅宿ニ投笈翌二十日所々見物せしゝども別ニ案内者の我れ等を誘ゑる人も死れど何を見ても頓ときつぞり解らぞ折角ニ善惡俱非の三境ニ對し乍ら其の能緣の三心是れハ印度「ヒロソフイー」中ニ物を見るニ就て起る心の實際なり他日便を埃て辨ぞ可し)を起すニ由し死く唯偶然として日の將ニ西ニ春んとする頃即ち旅宿ニ歸りたり然るニ前日ニ英國ニ留在して此の印度行のことを話せしとき英人皆ニ云く即今印度全國を擧て我が英國の版圖中なれバ都府人民ハ素より論死く仮令ひ僻陬陋巷の細民ニ至るまでも我ゞ英語を話さゞる者殆ど死き位ひのことなれバ君等若し印度ニ行こゞ勤めて英語を以て入り玉ゑかしと

云ハれし故ニ即ち英語ハ黒奇雄ニあり獨逸語ニ
い我をのもぞ大丈夫なりと自ら信じて參るしハ此
の「アルハベト」中ニ於て英語を能くをる者屢少ニし
て案内者さゑも傭ひ兼ぬる程のおとなりしゞ宿の
主人い太だ聊かの之れを話し得るニ付き何卒ぞ印度
人ハしく英語を能くし且つ印度の歴史ニ通じたる
人あらハ我等が為めハ傭ひ玉われかしと依頼せし
ハバ主人云く此の地い太だ不學な所ニて到底貴
望の人ハ之れ无しとのおとなるもぞ其れでハ仮令ひ
久しく爰ニ止まるも遂ハ无益なりと見占し故ニ速
ハ爰い去る可しと決したり（爰ニ於ても所々ハて釋
墓の所在を試問せしゞども更ハ知る者一人も无き
也）

翌二十一日午前第七時「アルハベト、ステーション」よ
り艤車ニ乘り又たゝ長路悠々かの有名なる鉛絶
嘶なる恒河の水流ニ沿ふて東南の間だニ向ふて走
る此の日天氣牢晴ニして日中の溫度殆ど日本の大
暑よりも尚ハ惡やハ暑く思われしなり午前第三時
頃「ミルシャーペル」と云ふ都府ハ至り宿を是を亦さ
英語を為すもの太だ希れハして何ハ事を問尋して

も更ふ了辯をるを得ぞ釋墓のことを尋ねても知る者亦た一人も死き也故ふ止むを得ぞ翌二十二日午后第一時「ミルシャーベル」を發し又た恒河ふ沿ふて東北の間だふ走り遂ふ恒河の南岸なる「ステーション」ふ至り爰ふ於て下乘せーふ數名の案内者(此の案内者ハ各々英語を為を)競ひ來りて云く是を即ち北印度中有名の大都會たる比拿力府とハ爰なり庶幾ハ來宿あらんたとをと依て其の一人ふ旅裝を托し即ち津頭ふ船を傭ひ乱ふ恒河を渡り北岸ふ達したり其をより行くこと一里余(英のマイレ)ふーて比拿

力府ふ至り即ち「ホツルス、ホテル」と云ふ宿ふ投笈したり此の宿さる家ハ印度風の構畫なれども太た爽大ふーて暑熱の憂ハ死かる可く加ふるふ主人亦た英語を能くすれむ百事ふ就き其の調査の都合も宜しくる可しと思わるー也是れまでハ所々の宿々ふていい印度の「ライスカリ」(土人の食ふーて實ふ好味なり他邦の「ライスカリ」等の及ぶ所ふた非さる也)而已を食せーご爰ふ至りて始めて又た洋食を呈せらる其の宰烹少ーも歐洲ふ讓らさる也

翌朝主人我々ふ向ふて君等た何きの邦の人ふーて

爰ゐハ何の為めよ参られしぞと尋ねらもし故よ余
鋼買の「アデレッフエ」氏よ答ゐし如く話せしらバ主
人大ひふ喜で云く然らば君等ハ日本の人なるか日
本人の此の印度ふ來りしゐとハ未だ聞かざる所ふ
して實ふ珍らしき邦の人々なる哉其の上ゐ我が本
國の佛教を信奉して爰よ來りて其の佛教興廢の事
實を調査し且つ佛墓の所在を尋問せんとせらるゝ
こと實ふ感銘の至りふ堪ゐざる也我れ等及ぶ丈け
の補弼ハ為し參らも可し何んなりとも遠慮なく托
せられゝしといと懇ふ云れし故よきをだとよ別ふ

六つヶ敷きことよも非ざれども庶幾くハ最も土人
よして英語を能くし且つ又さ印度の歴史よ通じた
る人を雇ひ玉わり度しと云ひけれバ主人の云く其
のことなきバ我き少しく考ゐ有り一兩日ハ竢ち玉
ゐ采り調べ參らを可し其の間だハ衰壊せし都府ふ
れども釋尊の古跡等も少ふらるされバ所々見物し
玉ゐゝと云われし故よ即ち其の意よ從ひぬ
扨て翌二十四日ハ午前第八時頃より宿の男（少しく
英語を話を）を案内者として先づ此の都府中王宮の
頽蹟を初め各國諸侯の舊館（印度封建政治の時諸大

名の交代在留せられし館舎なりと云ふ也）等を巡覧するに何れも皆ふ敗壊相ひ谷り僅に細門小舎の遺在せると其の茂樹喬木の寥々を見るの外り他ふきを而已嗟呼印度の衰敗何ぞ其れ爰に至れるや然るに我が日本の如きハ幕政の敗れ諸侯の斃れしハ却て王政大新の國榮を擧ぐるに在りと云へども今印度の如きに王政の止み諸侯の頽るゝハ則ち英國の財政を充さそに歸して印度經國の大軸と云ふ者ハ去て他國の有となる嗟呼印度の不幸何ぞ其れ爰に至れる然して我が日本の華族（大名）ハ皆ふ之れを東京

に引き集めたまども印度の華族の如きハ皆な之れを其の舊領地ふ居ら令むと云ふ也是れ即ち政略上の同異にして他日何れゝ得失あるや識者に非ぞんで知る能わざる所ふり其れいさて措き其れより「アストロノミー、キルヘ」（天文の寺）及び「ゴルデン、ツルム」（黄金の寺）「アツフエ、キルヘ」（猿の寺）等ゑ詣せしも此の中ゝ「アストロノミー、キルヘ」とハ土人之れを稱して天文寺と云ふ（此の寺ハ石を以て組建たる者ふして其結構の堅緻なる今日歐洲に在る所の石造形の王宮や大學校の如き者ゑして全構悉く石造なり此の

他は石造及び煉瓦造の古屋等の所々は在るを見れバ今日歐洲の石造瓦造の大原も是も亦と印度の文明と共は西したる者と思わるゝ也是も即ち釋尊曾て人民の日用百事は就て親く時間を指示を為めは此の寺の屋上は於て天文機械（十數有り皆ふ大なり）を陳列をる也然して其の陳方たる全く「ハルド、ポール（北極）を原として組建たる者はして人苟も之れは向ゑで一年及び一月の日數より一日の時間は至るまて賢と兎く愚と兎く一目了然たらざること兎し實は巧みなりと云ふ可き者ふ是然して其の機械（此の具各々其の度目を彫在せ是）たる皆な石を以て之れを造製し其の大さ皆ふ丈餘はして實は壯大なる結構なは是も即ち「ゾンヲ子、ウオール」の日時計ふして今日我々が携持をる所の時計の大原と云ふ可き也嗚呼三千年前の昔し此の如きの備具を為を釋尊の大識果して信徴を可き哉抑も古代の人民たるや「ゾンヲ子、ウオール」の日時計「ザンド、ウオール」の沙時計及び「ワッセル、ウオール」の水時計等を以て其の當日は適用せしと云ふことい歴史上は邈然之もを傳ふると云へども其の改進の秩序は於てい容易は之れを

知る可からざる也（「チモチーセン」氏云〳〵「ジー、チヤイト、デヤ、ヱルヒンドング、デヤ、ウオール、イスト、ニヒト、ゲナウ、ベカンテ」と云ふて時計の發明せー時代ハ密よハ知をぬと云ふ意也）然るよ百二十年頃「レーデル、ウオール」（車時計よー）て今日の回轉時計なり）を「コレステルン」ふ於て之を發明ー又ゝ百四十年の頃「ツルム、ウオール」（塔形の時計）を「ストラースブルヒ」ふ於て之れを發明ー其れより后ち千五百年の頃「ペッテルヘーレ」氏ゞ「ニルンベルグ」よ於て「タッセン、ウオール」（袖時計）を發明ー及び千六百五十八年の頃「フイクヘンス」氏ゞ「ペンデル、ウオール」（振時計）を發明せー芽よ依て時計の開進駿々とー て今日よ達をることを得たりと云ハども蓋ー此の寺の時計こそ世界一般の大原と云ふ可き欤次よ「ゴルデン、ツルム」（黄金の寺）よ至りし也土人云く此の寺ハ釋尊存在せーとき各長者等ゞ集りて建呈せー者なりと然るふ此の黄金の寺よ就て歴史上を以て之れを見るときハ凡そ全地球上よ於て二つ有りと云ふ也其の一ハ此の印度の比拿力府の「ゴルデン、ツルム」是き也又ゝ其の一ハ緬甸國の藍古の港よ在りと云ふ也然るよ此の比拿

力府の「ゴルデン、ツルム」い其の寺の屋根二つ有りて其の一ハ二丈五尺計りふして其の周圍凡そ四丈計り有り又さ其の一ハ其の高さ一丈五尺計りふして其の周圍凡そ二丈餘も有る可き也然るま其の二個の屋根を葺くま黄金の板を以てして其の板の厚さ八分（竹尺なり下も之れま倣ゑ）計り長さ四尺餘り其の幅ハ一尺二三寸有りて其の金色たるや最も真の黄金色まて我ゞ甲州金よりも尚ゑ真黄金色なりと思わる〳〵也然るま「コンクレート」（日本計りのことを考ゑて居ること）の考ゑを以て之れを云へゞ我ゞ邦ゆ

金の鯱やど金細工でも世界第一の壯大なる者ハ有らゞと思ゑども之れを廣く「アブストラクレヨン」（總て世界中を考へ亘ることの考ゑを以て之れを云へゞ印度や藍古ま於て此の如き金細工の壯大なる寺ゞ有るまも闕らぞ我ゞ邦の此の金の鯱こそ即ち世界第一の壯大なる物なりと自ら極めて前年有名なる墺斯土利國の大博覽會ゑ遥々持ち出せしこと抑ハ如何ま知らぬゞ佛けとハ云ひながらも餘りふしても塊然たる「コンクレート」の考ゑなりと云ひざるを得んや此の如き狹小なる考ゑを一日も早く放却

せねばならぬと云ふことを深く心底に感悟せしぞ
かし次に「アツフヱキル〈」に至るまで凡そ猿猴の多き
六七千匹も有る可しと思わる嗚呼名を實の賓なる
哉此の寺も昔し釋尊の建つる所ふして此の如きの
猿猴ども原と佛德を欽して集りし者と云へども是
れを必竟して野人の口碑ふして別に来る所无きな
り以上の寺々を本と皆な釋尊の建る所と云へども
今日は悉く「ブラマ」宗の所有となるし也是まで歴
史上の説ありて實に悲慨の至りに耐ゑさる也今日
は先づ之をふて旅寓に罷り帰りし也

晩来主人余が席に来り云く兼て尊托の一人漸く之
れを得たり名づけて「ライインブ、チヤン子ル、バ子ルゼ
ル」と云ふ也此の人は年し既に六旬ふして印度の歴
史ふ通じ兼て英語を能くそれで先づ試に之れを使
用し玉へうしと云されし故に即ち同氏を傭ひ之れ
より日々印度實際（專ら釋尊滅后の實際等なり）のこ
とを歴史上に采聞したり此の書き采りたる者遂に
數卷に及ひさまで今爰に之れを枚舉せるに耐ゑざ
る也他日便を俟て述を可き也

釋尊墳墓偵尋の話

一日余「バ子ルゼー」氏ニ對ふて云く余曾て玄奘の西域記を讀で此の邦の幅員其の時の民數宗旨の大小等ハ粗ぼ之を知るニ足ると云へども單純なる僧家の筆法少しく世ニ遠しと云ふべきを得ざ其の上ゑ復た既ふ千有餘年を經過しされば今日の事實を知るふ由し无き也頃日幸ニ獨逸の「レラーギントワイト」氏の印度旅行記を讀むニ即ち「デヤ、ランドレヤフト、デヤ、コルトア、ウント、ジッテン、デヤ、インヘルビンドング、ミット、クリマーチーセン、ウント、ゲオロギーセン、ヘルヘルトリス」と云ふて即今此の印度の地理と氣候の間ふ於て住む所の民人の社會と文明と及び風俗の槩數の如きも頗る之れを知るふ足りし也然るニ今亦た自ら來りて爰ふ跋渉し更ニ氏の説明を聞て益々其の詳明比考せる所ありて我れ等歸朝の上ゑも必ず大ひふ其の為を所ある可きの秩序を得たり實ふ氏の嘉貺と云ふざるを得んや此の上ゑふも氏若し釋尊の墳墓の所在を知り玉まもぐ懇ふ我もふ告げられよ假令ひ千里の遼遠と云へども我も必ず詣至せんともら也と云ひしのむ氏云く余不肖と云へども他事なれば如何やうとも對辯も致を可くなれ

ども釋尊墳墓のことと我れ等五十年來此の印度ふ
住在もと云へども未だ其の何れゑ在りと云ふこと
を聞ざる也凡そ三千年來の今日ふ〜て之れを偵尋
せんことと太だ甚ぞ難うる可き也寧ろ曠日累久徒
ゑ煩勞せんより如りぞ他の古蹟等を尋ね玉わんふ
もと云されし故ゑ余云く去れぞとゑ此のことと我
れ歐洲ゑ在りしとき諸の識者達ゑと熟計り前日ゑ
鋼買港ゑ着せしとき「アデレッフエ」氏ゑも訪求ねた
りしゑ何れも皆な知れ難しとのことなをども當府
い鋼買よりい既ふ千數百里(英の「マイル」)も印度の中

央ゑ在る有れバよもや知れぬことの有るまじと思
ふて尋ねしぞあし其の上ゑ日本開闢以來來門の災
ゑ來る者全く我きを以て大始とすれバ之きを求む
るゑとも亦た是れ我ゞ本分とする也若しや其の墳
墓の失亡せしとならば責めて其の在りし地方ふて
も示めし玉されかしとて種々の地名(西域記釋氏要
覽名義集等その他の書典ふ散在せし所の地名)を擧
て咨問せしかども我ゞ稱する所の者も總て釋尊在
存のときの「サンスクリット」(古代の梵名なり然るふ
今より千有餘年前ゑ比耳西亞等の他邦の言ゑ入り

來りて土語と混成してより以來印度の話し方遂ふ今日の變態ゑ至る之れを「パリー」と云ふ也)の名なれバ「バ子ルゼー」氏さゑも之れを解することの能ゑざもバ互ゑ邈然とし(て殆ど其の針路を得るふ由し无きゑ至れり是ゑ於て余卓を擊て歎ゼて云く今我れの爰ゑ來るい即ち是れ千歳一遇なり我れ倘し容易ゑ此のことを烏有ゑ屬せーならざ誰ゑ又た來りて之を踪する者あらんや丈夫苟も斷じて爰ふ來る氏ふーて之れを知らずだ氏其も之れを措け我れ豈ふ匏瓠ならんや我れ印度二億五千萬の人ゑ計りて責めて其の古蹟なりとと必ず實乎ね參らを可しと云ふバ「バ子ルゼー」氏も少しい蹙然の色を現さし且くい沈止し居られしの稍やありて手を摩して云く嗚呼師が素望の岸然たる實ふ感餘りある哉故ふ我れ亦さ囊を叩て之れを思惟するゑ五年以前のことなりしが即ち爰(比拿力府)の「チヤイトング」(新聞)ゑ即今中印度ふ於て釋氏の墳墓を堀り出しさとゑ尋ね出だせしとゑ云ふことの有りしなれどと何を云ふも新聞上の記說ふして然も數百里遠外のゑとなれバ左のみ意を注めざりし也師若し試ふ行あんとな

らバ宜く中印度ヨ入りて之れを尋ね玉ふゝし或ハ千ふ一つも之れを得ることを有ん歟然し乍ら唯だ師の意ふ任せ可き而已果して然らざるときハ師其も我ゞ杜撰を咎むるハと勿れと是ヨ於て我れ粲然と〳〵て笑ふて云く氏憂ふること勿れ我も自ら行て自ら過る即ち何んの氏を咎むることゝ之れ有んや然りと云へども今此の氏の一説こそ即ち是も烏有中の一針ふして凡そ其れ烏有ヨ依らさきバ真有ヨ達せらきさるハ物の數なり我も必ず氏の一言ヨ依て行く可し氏其れ憂ふるハと勿もと云ひけもむ「バ

子ルゼ」氏も大ひふ安心致されし体ふて云く然らバ師仮令ひ行くとも今且く爰ふ留笑し玉ふのーと我れ即ち云く諾我も今且く留りて尚ゝ咨問ることも有る可しとて此の日ハ是れヨて散じさり

以下印度の「クリマ」及び内狀等

一夕余「バ子ルゼ」氏ヨ問て云く抑も印度の「クリマ」氣候たる果して如何程の温度ヨまで昇るものとそるや即今既ヨ十一月の末ふして我も等日々彼此の間ふ徘徊そるふ午前第十一時頃より午后第三時頃までハ蒸熱日本の大暑の如し燒くか如くとても

歩行い困難なり此の分なきを暑中まハ如何ゑどの温度ふまして昇るものなりや「バ子ルゼー」氏云く我が邦の温度たるや極暑中ふた高きハ即ち百四十一二度ふ及び(人皆な云く本年ハ餘ほど暑しと云ふ也)又た低きハ即ち百二十四五度まして止む(人皆な云く本年ハ甚だ暑ゑらぞと)なり日本などた大暑中ふた大体いゑゑど昇るものとそるや余云く我が本國の如きハ九十四五度ま達するを非常の極暑として人皆ふ云く蒸熱太だ甚だしと然るま我が日本人をして此の温度ふ逢ゑ令めを必ゑ舉な焼死を可し宜べ

なり頃日艠車曠野を過りしとき往々石面を見るふ焼けて宛も火事場の石の如し皆な悉く黒色を浮帯せり今氏の説を以て果して徴をるま足る也

「バ子ルゼー」氏云く我が邦の如きハ暑きた即ち暑しと云へども四季の草花た同時ふ笑きて少しも四季ふ関をること无くゑれを殖ゑきえをれを常時も芽を茁し花笑いて時として花の有らざること无き也然して中印度より東南印度(西北印度の如きた乾野碵地多くして東南印度の如くた物が出來ぬふり)の如きハ一年間ふ三回づゝ獲收をるを以て常とを其

の他の菜蔬の類ハ至るまで蕃殖充牣して少しも欠所あること无し之れを以て我が人民の幸ひとする所かり豈ハ他邦人民の耘耕過勞して僅かハ得の類ならんやと云云龍窈のハ以為く是れ即ち住めだ都と云ふもの歟然し我々を以て之きを云ふときハ假令ひ三回の獲收ハ四回の榮を得るとても此の如き大暑の邦ハ住むことハ能ふまじき也前日ハ獨逸ハ在りしとき「オルデンブルヒ」(印度のことを委く記したる史なり)を見るハ云く印度の如きハ蒸熱の邦なれども其の黍稷の蕃殖ハ於ていハ全世界中其の比无しと云ふも可なりハ歟其れ故ハ人民の將欲いハ甚だ充牣して敢て他ハ求るの意无きが故ハ其の人民の性質ハ「チーフ、デンケン」とて唯だ内のこと計りハ考ふを深めて他邦ハ向ふての方略對交等のことハ少しも之れを持つこと无く其の上ハ蒸熱の為めハ間さえ有れバ懶眠をすることを而已樂んで居る故ハ人の氣力と云ふ者ハ早く衰萎ふて何ハごとも長く之を保持もるハと能ハざる故ハ折角ハ開けた文明も早く衰ふ去つたる者なり即ち亦た「サキャモニー、ブジイスモス」(釋迦教)の教ふの如きも意外ハ早速ハ

衰えたるえ蓋し亦た此の理ふ依ること无んやと云
云せり龍云く此の「オルデンブルヒ」と云ふ人え「サン
スクリット」(古梵字學)の博士ふして余獨逸ふ於て屢
々此の人ふ面ぜーゞ此の人印度ふ留學そること數
年ふして其の見る所の實撿説なきバ今諸君の印度
を見る為めの一片の参考ふ記呈そる而已
印度ふ於て除く可らざるの國難
余「バチルゼー」氏ふ問ふて云く余曾て英國ふ在りし
とき「チール、ガルテン」の動物園ふ行て印度の獅子猛
虎及ひ毒蛇(長さ七尺計り周圓七八寸も有る可し)を

見るふ人皆な云く此の三獸え印度人民の如何んと
も為そ可らざる所の三害物なりと今尚ほ果して
然る歟氏云く去きぬとふ此の三獸い我ゞ邦國初メ
來の害物ふして民人の之れふ罹りて死そる者年毎
ふ殆ど七八百人ふ及ぶ也君見ずや彼の鉛絶斯河の
左右ふ邈たる曠野ありて往々數百里の藪原を見る
其の中のふ猛虎を捕生そ(日本ふ於て竹ふ虎と云ふ
諺の來る蓋し爰ふ基くならん歟)其の數ぞ幾く百と
云ふことを知らぜ又た獅子い有名なる喜馬拉山中
ふ蕃生し四方の群山ふ移住して彷徨喫咤たる是き

亦た如何とも防止を可らざる也又た毒蛇の如き
も野と死く山と死く隱見恒死く人を見きむ必ず搪
探をる宛も丸を飛バをゞ如し苟も一度之れに觸る
るときハ立ゐ即死を其の害實に獅子猛虎より也太
きとの有るなり此の三つの物ハ政府と云へとも力
ら之れを除去をる能ゐざる所ふ〳〵て我ゞ邦永遠の
大害物なり嗟呼果〳〵て之きを「クリマ」の為を所とせ
ん歟未だ何者の所為たることを知らざる也然し我
ゞ邦の人民の如きも槩ね此の害を逃るゝの械め方
を知ると云へども今諸君の如きも他邦の人殊に佛

墓搜索の為めにハ如何なる地に至ると計る可らら
ざきむ深く注意し玉えゝ〳〵と
「バチルゼ」氏云く其の上え我が邦ハ恥〳〵乍ら小
賊大賊の多き邦にして行旅の此の害に罹る者太だ
少ならざれば是を亦ゝ深く注意し玉ゑゝ〳〵と余
答て云く其の委詳も頃日艅車中に於て之きを聞く
今亦ゝ氏の言に依りて益々徵をる所あきむ深く械
心を可し氏其れ之きを安んぜよ氏の懇到ハ我き等
死事を保つの方針なり實に感荷ふ耐えをと謝しゝ
り龍云く邦苟も費弊をるときも人民爰ふ至る嗟呼

恐る可き哉

「バチルゼー」氏云く貴國(日本を指す)の如きは即今文明日々に開進して萬國と對峙するに足ると實に欽然に耐えざる也然るに我が邦の如きは衰爛爰に谷り全國擧て英國の所領となり我が民人の苛政に苦む未だ今日より太だ甚きは有らざる也今其の一を以て之れを云へば鹽の主榷法(龍曾て漢の汝南の桓寛の鹽鐵論を見るに漢の武帝の時此の鹽鐵主榷の法を行ふて官專ら鹽鐵の利を占めたること有り主榷とは已き獨り其の利を收むるの謂也今英國の鹽に依て專ら其の利を占る者宛も漢の主榷法に似たる也然るに漢の主榷法は唯だ其の賣り方を管せる而已にして其の價ひは平常に異なること无し今印度の如きは其の法非常の價を倍取を實に苛虐と云ざる可けんや是れ也是れ即ち此の法を以て印度全國の鹽の價を統一して英國財政の收入を計るも也即ち其の價を云へば印度の「ロピー」(天竺の壹圓)の十分の八分五に當る也此の中に其の一分を以て正く其の價とし其の七分五は之れを求むる為めの印紙代とする也槩して日本の金を以て之れを云へ

び拾錢を正く鹽の代價となり七拾五錢を之れを求
むる為めに添出を可き印紙代とある即ち惣計それ
を鹽壹合の價が八拾五錢の位に當る也其を鹽を得
るの貴き既に爰に至る其の上に我が邦の如きを幅
員廣大にして海輪遼遠なきを鹽を得るの路この苛
法に依るの外の更に他方なき也是を以て我が細民
の如きは苦考窘案して窃に山土や樹葉等を煎て
少しの鹽を采るに其の事苟も發現をるときは忽ち
重懲役等に處せらるきて家族擧て遂に饑餓に倒滅を
る者往々少からず鹽の為めに苦む者亦た復さ爰

に至る也其の他の國税地方税及ひ諸運上等の如き
從ふて其の倍蓰をる推て愍察し玉ふらし是を以て
我が人民の如き其の勞力に得る所の者を他分を之
きを公に收めて其の殘る所の者を以て僅かに我が
一命を活ぐ而已其の上に英國の威武に統壓さきて
朝の起床も英國の大砲夜の卧床も英國の大砲唯だ
大砲々々の響の内に恠怪して少しも安心の位地を
得ぬぞゝ嗟呼何ぞ英人の苛虐ある嗟呼何ぞ我が人
民の不幸なる實に悲慨の至りに耐えざる也之きに
就て我が土人窃かに以為く若し兵力を以て此の挽

囲を計らんまた英國兵敷の嚴密堅緻なるとても我ゞ微力を以て之を為さんまた却て一層の大害を惹起せん如ゝぞ先づ我ゞ文明を發育して然して后ち之を計らんまたと思ゐどもさしゝり今日の虐政を如何せん哀き我ゞ國情を憫察し玉えゝとの親話を聞ひて余も亦た坐ろまた悲慨の思ひまた打ち沈みさり印度の代言人

「バ子ルゼー」氏云く我ゞ印度の如きも亦た訴訟裁判また就てハ四局（勸解初等上等大審院）を設立して其の裁判上の形ちまた於てハ備具ハ則ち備具せと云へども其の實際の如きまた之を如何とも云ふ可からざるの情實ありて人民の困悼實ふ惟れ谷まる也如何となきぞ其の裁判官ハ減を崇んで法を枉げ代言人ハ利を逐ふて人を眩し細民ハ衆を比して姦を計るを以て也然して其の災原を云へバ獨り其の裁判官また在る也如何とおれぞ我ゞ邦の如きハ温度の高き百三四十度ふ昇りて蒸熱實ふ太だ甚きゞ故また他邦の人の來り住むの邦まハ非ざる也然るまた英人の如き好んで來住せる所以ゝの者ハ唯だ利是き見る而已且え本邦（英國）ハ遼遠まして事多く曖昧ふ附する

も敢て之を咎むる者无きむ入滅の手段太だ行と
き易きが故ふ各官皆な蓄財歸郷の主義を以て來る
也是を以て我が姦民その意を諭し其の代言人と
事を附會して以て良民を擾惑し其の細民と衆を比
集して以て良民を牽強するの間だふ於て訴訟百出
して其の煩擾なる牧て舉ふ可からざる也終ふ之き
を大審院ふ上告するも院尚ほ賄力を以て勝を得き
ず姦民益々其の欲を放まし良民(專ら金持ふ在り)多
くハ其の害を受けて人民の悲慘怨曠又と牧て舉ふ
可からざる也近來英帝より若し印度ふ於て其の裁

判上ふ就き服承せざること有るときハ我が本邦ふ
來り訟ゑよとの令あり是を以て實ふ其の情ふ相ひ
耐ゑざる者(仮令ひ此の上ゑい身代を破碎するとも
いのふも閣うきぬと云ふ情實のある者多くハ金持
ふ在り)等或ハ五株六株申し合せて代言人を撰舉し
て以て遠く(數千里の)彼の本邦(英國)ふ行ひ令む其の
費用等實ふ莫大千萬なり之れが為めふ遂ふ其の家
産を破碎して斃るゝ者天下比々少なからざる也然
るふ姦人(代言人)益々此の弊ふ乘じ兩國(印英)の間ふ
出没して我が人民を瞞着誑引して大ひふ其の利を

計る者未ざ牧て舉ふ可らざる也然して此の難ま
罹る者富人最も多しとする也之れを以て我ゞ邦の
費弊日々ま究りて其の止る所を知らず實ま悲慨の
至りま耐ゑざる也と云云龍云く前日ま英國の「ペオ
コンパニー」艦まて西印度の鋼買港ま來りしとき同
乘せし印度の「アボカ」(代言人)「ロックークーラアロー
ブ」と云ふ者の云く我れを今度訴訟六株を持して遥
(數千里)ふ英國ま至り留ること一年半許り(失費知る
可し)ふして歸國する也との話を以て今「バ子ルゼー」
氏の話と徵して印度の内情實ま氣の毒の至ふ存ぜ

らるし也之れま就ても我ゞ日本の金持ち連中ま金さ
ゑ有れゞ邦を破れても我きを即ち大丈夫なりと思
ふやうな坪違ひの考ゑハ止めなさいよ邦ゞ破れさ
れゞうるさくとも一番ま難儀する者ハ金持ぞかし
此の印度の實況を見て知り玉ふべし其ゑ故ま家ゞ
大事なきバ先づ邦を護る可し嗟呼
印度佛敎興廢の話
一日余「バ子ルゼー」氏ま問て云く即今五印度中の宗
旨何ま宗を以て最も隆盛なりとするや「バ子ルゼー」
氏云く今我ゞ全國人民の信奉する所の者之れを「ゼ

ニズム」宗と云ひ又た之を「ヒンヅル」（印度の國教と云ふこと）と云ふ也釋迦教の如きも皆な去りて他國（北ハ西藏西ハ「スペリヤ」北耳西亞東ハ緬甸、安南支那日本等）ヨ行き却て我が本國ヨ於てハ之を信奉する者尤し〳〵と云ふも可ならん欤余又た問て云く今氏其の「ゼニズム」教と釋迦教と何つの項より興廢せしと云ふことを示し〳〵玉われゝし〳〵と云へバ氏云く余ハ宗旨者ヨ非ざれど其の詳細ハ之を知らぞと云へども凡そ歴史上と人の口碑ヨ在る所を以て之を云へバ釋氏在存の時を天下靡然として其の風ヨ鄉

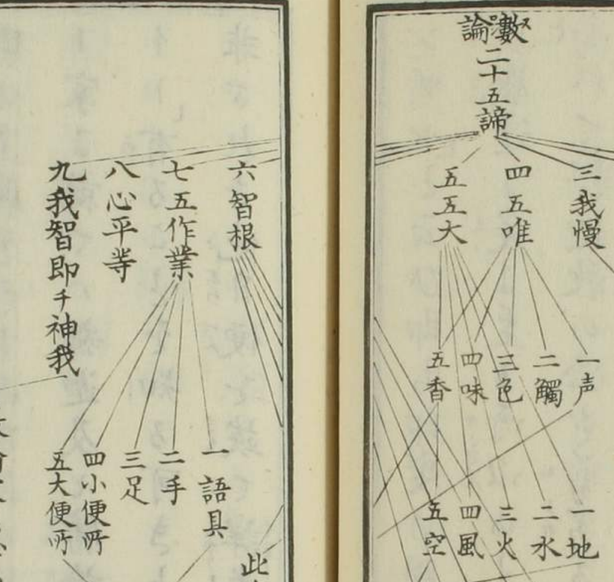
わざるもの尤し〳〵と云へども佛后五百年の項ヨ至りて佛徒高慢自負稍や怠弛そるの際ヨ及んで「ブラマ」（「ゼニズム」）宗の教徒涵養忍耐自ら勉むるの久しき天下の人心釋迦教を放きて多くも「ブラマ」教ヨ歸向せし也此の時ヨ中りてや兩派互ヨ陵轢して往々諍論（或ハ其の太きを大いヨ戰伐ヨ及ぶ者あり）ヨ亘る（龍云く三十述記八の五十九丁因明大疏三の二十八丁以下等其の諍狀を記を今氏の云ふ所粗ぼ之れヨ當る歟）もの太ざ少なからずと云へども佛徒一般恒ヨ敗を采りて聲價益々落沈せり中ヨ於て一二の力ら

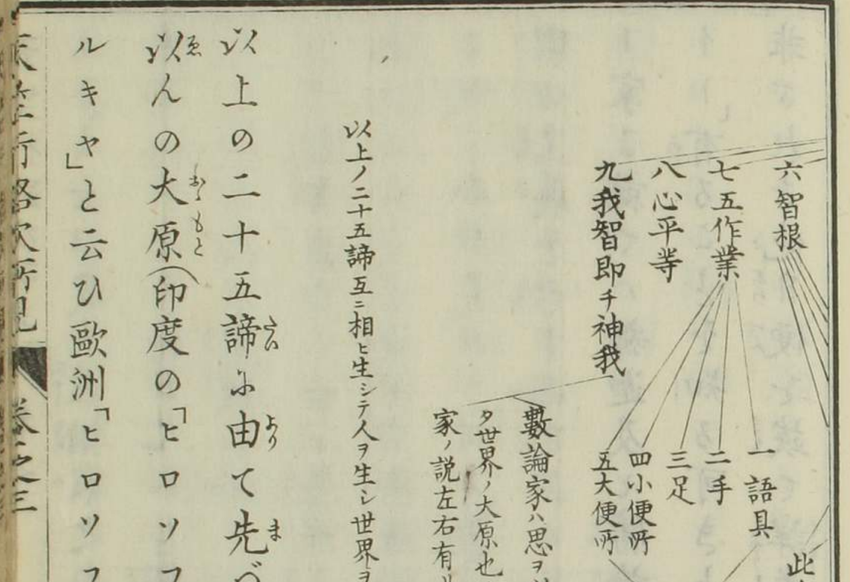
能く之を補くる龍云く三十述記八の五十九丁ゟ云く世親勝義七十論を造りて彼の論ゟ對し彼の外道を破そと云ふ者蓋し之きゟ當る歟者ありと云へども所謂る大厦の崩るゝハ一木の支ふる所ゟ非ぞ千有餘年の今日ゟ至るまで佛徒少しも之れを改むる所无く遂ゟ此の委靡敗壞を来したり哀む可し彼の有名なる「アストロノミー、キルヘ」や「ゴルデン、ツルム」等まても皆な悉く「ブラマ」宗の所有となりて印度全國の教権全く「ブラマ」教ゟ歸向せり是を以て我が全國の人民日々ゟ益々信奉して此の宗を稱して「ヒンヅル」と云ひ即ち印度の國教とする也嗟呼二教の興廢遂ゟ爰ゟ至る所以のものハ「ブラマ」教の必ぞ高尚れて釋迦教の必ぞ劣るが故ゟ然るゟハ非ぞして全く是を之れを維持する者の力らの如何んゟ依て然るものなきぞ決して他の罪ゟも非ざる也と云云龍曾て述記及び金七十論等を讀む今「バ子ルゼー」氏の話を聞き思ひ合せて大ゟ感あり我が日本の宗旨者たるもの深く考ゑられよゝ然して此の「ゼニズム」宗さるや段々調査する所ゟ依れぞ概ね是れ數論派の宗義を立る者なる此のことハ我が別記ゟ委

〜乗載〜たゞ他日便を俟て述を可き也

印度「ヒロソフイー」の略示

「ゼニズム」即ち數論「ブラマ」家の所立槩意を示す左圖の如〜（數論家も二十五諦を立てゝ世の中を支配する也）





以上ノ二十五諦互ニ相ト生シテ人ヲ生シ世界ヲ成ス也委クハ他日辨ス可シ

以上の二十五諦ふ由て先づ人と世界の出で來る所以んの大原（印度の「ヒロソフイー」家之れを「ヤイナバルキヤ」と云ひ欧洲「ヒロソフイー」家之れを「アブソル

ート」と云ひ我が性相家之れを阿頼耶藏と云ふ也是き等のことを他日之れを辨ぜんとする也）を知り然して后ち人の真理を知り世界の真理を知りて政治あり宗旨ありと云ふ真理上の次第秩序を全知する也此のことを金七十論（數論「ブラマ」家の書なり）を見る可し今日を「ゼニズム」宗のことを云ふ就き數論家の主義を示を而已此の外の總て印度「ヒロソフイー」家に就てハ釋迦及ヒ勝論「ブラマ」家等の「ヒロソフイー」有ることを知る可き也今之を辨ずるに遑まなざれど他日便を俟て詳悉に述を可し中々歐洲「ヒロソフイー」の浅薄なる類に非ざる也然るに「バ子ルゼー」氏の話に由るに「ゼニズム」宗の如きハ印度全國に於て凡そ分れて三十餘派とあり何れも皆な信奉隆盛なりと余前日に「ゴルデン、ツルム」の寺に詣せし時その拜至人の多き肩摩肩擊實に人の堆をなを導人の云く毎日午前に恒に此の如しと然して苟も男子たる者を亦た必ず其の額に白粉を以て三＝＝＝二＝（是れハ鼻の形ちに引き下を）此の如き線を画けり是れ皆な同宗異派の徴とする也と我れ鋼買より爰に達する凡そ千數百里その見る所の人

苟も男子たる者ハ此の徴しを画らざるハ未だ一人も之れ有らざる也且ま人民の實況を見るふ實ふ宗旨信仰の厚き歐洲と云へども是れまた及ぶべと思らゝ也扨て又と此の外ゝ内状ま就て土人の嫁娶出誕葬儀祭典寺の生活等より耕工商衣服食物及び娼妓芝居等のことま至るまで委く乗記したくも有れども餘紙も尤く亦さ發兌の遲回せんことを恐るゝが故ま今ハ之きを略を他日復た續編を造りて以て之れを述せんとをる也先づ采り調べも粗ぼ其の概數を得たれど是れより「バ子ルゼー」氏の話の如く中天竺の方ゑ向ひ佛墓の所在を弔問ね參らを可しと思ゑバ余「バ子ルゼー」氏ふ向ひ是れまでの荷恩を深く陳謝し且つ其つ意を述べけきど氏も亦た之れを許されて云く師是れより中天竺ま向とんとならバ再び恒河を乱り「アルラア」を經て「パトナ」ま至り爰ふて能々尋ね玉いバ或ハ其の方角も解りつ可きぬと懇ま其の路次を指示されけきど翌二十八日午前第七時比拿力府を發して再び恒河を乱り午后第三時「アルラア」ま著し今夜を爰ま宿し取り敢ゑず佛墓の方角を咨問せしかども語さゑも確乎ま通ぜさ

れば解る可きやうも死ければ翌廿九日早速ゑ爰を發し「パトナ」(爰を即ち中天竺の入口也)の方ゑ急ぎけり午后四時過ぎ同所ゑ着し今夜ハ又た爰ゑ一宿しけれバ宿主の僅ゑ英語を話すゑ由て即今此の中天竺ゑ於て釋迦佛尊の墳墓を堀り出したと云ふハ果して何れの地なりやと云ふことを英語の中ゑ手合ひ摸合ひを雜ぜ加ゑて尋ねけれど主人僅ゑ其の意を了せしや其れを「バハル」「シラガチー」「ガヤ」の間ゑ行て尋ねようしと云ふれし故ゑ太だ便り无き苔ゑなれども何ハ兎も角この言を方針として行く可しと決

したり

以下正く佛尊の墳墓を偵尋そるの話

翌二十三日「パトナ」を發そるゑ付き是れまでも多分鐵道ゑ乗りて来りしなれども今ハ專ら釋尊の墳墓を弔問し參らそ可けれバ鐵道而已ゑて沿行しても とても偵尋の詳細を悉そこと能ゑざれど是れよりハ或ハ牛車(馬車い之を兄し)を用ひ又たハ歩行をも為そ可しと路次の行計を議定し先づ取り敢ゑそ牛車一輛を傭ひ「バハル」や「ガヤ」ハ西南の方ゑ在りと聞けバ其の地方ゑ行く可しと方針を定めて午前第八

時「パトナ」を發して悠々たる知らぬ田舍の方ゑ向ひつゝ「ガヤ」の里ゑハ何ふ行くや釋氏の墳墓も何れゝ在りやと英語を以て尋ねつゝ山を越ゑ水を渉り村あまを尋ね人あまバ問ひつゝも尋ね行く程ゝ日も早や西山ゝ呑きけれを今日も速く宿を可しとて山の手の小村なる百姓の家を叩いて我々ハ日本人なゝ今夜ハ一宿をさせ玉ゑらしと英語を以て懇ゝ依頼せしゝども最早や此の邊も英語さゑも通せざるゝやさつぱり解らぬ体ゝ見ゑけれを今も詮方なく日本語ゑ手合ひ摸合ひを打ち雜ゑて述べけをも却て其の意を弓せしゝや何ゝやら解らぬ言を云ひなゞら手を振て相ひ斷とる体なれバ強て頼む可き術なけれバ其れより四五家も依頼せしゝども如何ゞ思ゝれしゝや皆な悲く斷りの体なゝを黒崎余ゝ向ふて云ゝるゝゝまもケ程まゞでこと分けて依頼をろゝ承引の无けれゞ最早や午后第十時過今夜を如何ゞしゝ玉ふや到底野宿でもなされる欤兼て承る所ゝ由れゞ猛獸毒蛇の怖めも有れゞ如何ゞなされる積りなりや實ゝ悃り入りますと徐々不足を鳴らし掛けらゝ故ゝ余笑ふて云くゝ左而已悚れ玉ゝざれゝし我

れ必ず氏をして安眠させ参らせ可し抑も猛獸毒蛇の害等ハ必竟ドて凡人小人の悚る〳〵所の者ふして大人豪傑の敢て屑とせざる所なり仮令ひ彼れ来るとも我れ必ず宜く處を可し氏決して悚る〳〵こと勿れ若しや宿めて吳れぬときハ野でも山でも草蓐石枕何の安眠されぬことやこれ有らん都て我れハ托せ玉ふゝ然し乍ら(是れまでて專ら黒崎ハ言ひ令めたり)此の上ふも我れ我ゞ膽略を以て數言間ハ宿ハ借り受け申せ可し氏且く竢てと云ひ捨て更ハ一方ハ行て我ゞ天然の日本語を以て同く手合ひ摸合ひを振り回して依頼せしかバ速疾ハ承引致されとり(是れ即ち日本語手合ひ摸合ひと云へども得失ハ其の使ひ方たハ在り諸君一笑せよ)即ち黒崎を呼んて云く見ハ宿ハ既ハ借り受けたりとて相ひ共ハ其の家の柴部屋体の内ちハ投宿して何ハい兎も角大ひハ安心致したり宋の文天祥ゞ是即我安樂國と云されしを思ひ合せて大笑しけれ然るハ小麥の蒸したる物ハ白砂糖を掛けさる食物を與ふられしゞ其の味ひの佳なること宛も漢の文叔の滹沱河の麥飯ハ相ひ讓らざる也今日ハ非常ハ配慮して頗る疲

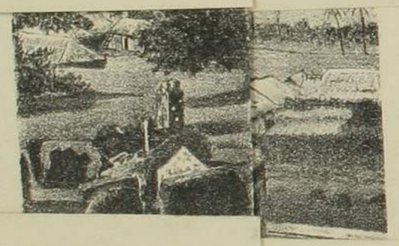
勞せしゝべ端しに充く柴部屋の内ちまに沈睡せり
翌朝に至り盥漱既に畢りて主人又さ例の食を来り
呈して手合ひ摸合ひと共に何まやらチンプンカン
を述ぶれどもさつぱり解らず然しを乍ら粗末な田舍
物を差し出さい氣の毒なと云ふの体に見ゑけもで我
れ等も亦さ英語を以て昨夜来の厚意を陳謝しけも
で彼れ亦さ語い分らねども粗ぼ其の意を解せし体
にて一坐の對交太ざ整頓せり稍やありて我れ等主
人に向ふて（英語を以て）釋迦の墳墓ハ何れに在ちや
又た「ガヤ」の里い何れの方に在りやと尋ねけれど彼

れ全意を解せざるども唯ざ「ガヤ」と云ふ名而已を分
りし由しにて遥り西南の方を指して云く「ガヤ」と是
に於て我れ等茲渺中に一つの行路を得たる思ひに
て深く主人の懇到を謝し其れより名さへ分らぬ
村を發して之れより前きい長路悠々唯々手合ひ摸
合ひと諸共に「ガヤ」「ガヤ」と而已尋ねつゝ山を越え水
を渉り日落れば孤山の下に宿し日出れば一水の涯
を發し宿々既に五宿遂に十二月三日午后第十時頃
「ガヤ」の里に着しけり（路次の苦悃等ハ爰に詳悉せ可
らざる也）扨て其れより兩三家を叩ひて一宿を依

頼せしよ例の如く皆な相ひ斷とられけきども黒崎も宿采りい大分上手よ成りたれど百方遂よ一つの納家体の者を借り受けたり是よ於て笈を下し坐を占めて先づ「ガヤ」まで來りし上い佛墓の有无も日ならぜして決を可きことの近きを悦びつゝ遂よ洋氈よ卷りきて寢りたり

正く釋迦佛尊の大墳よ詣至をる話

明て四日の朝第七時起床し食事畢りて然して后ち余黒崎よ向ふて云く史よ云く白虹日を貫くとハ人の至精遂よ達をるの謂ふして凡そ人尚も精神あ



道龍師自ラ天竺ヨリ

此ノ書中ニ箱入スル所ノ當圖ハ餘リ大相ニ付キ寫真
樣ヲ願ヒ別ニ編圖ニ致シ所望ノ人々ニ附與ス可シ

當圖ハ道龍師自ラ天竺ヨリ持來フル、所ニシテ生譲デ之ヲ親寫ス　玄ニ堂緑山

人の至精遂ゆ達せるの謂ふして凡そ人苟も精神あ

ちゞ何事か成らざらんや我も等去日鋼買と發して以来爰ゟ達そる幾んど千八百七八十里も有る可し此の間の苦心焦慮亦さ果して幾于ぞや然るゟ死事遂ゟ爰ゟ達し得る者ハ唯だ是れ一つの精神ある而已氏其れ旃れと勉よ佛墓の有死を決せることハ正く近きゟ在る也と黒崎も大ひゟ感奮して云く諾我れ將ゟ勉めんとそる也と是ゟ於て宿の主人を呼びて云く我々ハ「イヤッパンニース」(日本人)ゟして釋迦佛尊の墳墓を弔問し參らせん為めゟ来れり庶幾く御墓の所在を知らせ玉ゑゝと英語或ハ獨逸語

と打ち交ゑて陳しけれどもさつぱり解らず黒崎云く此く巨細ゑ述ると云へとも彼れ少しも其の意を解せざれど如何ゞ致す可きやと云ゑれし故ゑ余云く此の上ゑを百事我れゑ任し玉ゑ我ゑ必ず問出を可し彼れ亦た犬ゑ非ず猫ゑ非ず均く是れ人なきバ仮令ひ言説の通ぜざるも何んの其の意の致されざることゝ之ゑ有らんや是ゑ於て余自ら日本語中ゑ手合ひ摸合ひを差し加ゑて種々之れを咨問をと云へども彼れ尚ほ之ゑを解をること能ゑず實ゑ百尺竿頭之れを如何せんと思ふ所より一種の工夫を回

らし墳墓の形ちを画して「サキヤモニ」「サキヤモニ」と云へど彼れ稍や之れを解せし体ゑて頻りゑ點頭しける故ゑ然らば其の地方ゑ行く可し牛車一輛を傭ひ玉ゑれと「ロピ」(印度の壹圓)を出して種々依頼しけれども其の意少しく了し兼ねし体ゑれど是れ亦ゑ牛車の形ちを画ひて示しけゑバ忽ち了解せし姿ゑて大ひゑ笑ふて點頭しつゝ戸外を指して出て行く且くありて一輛の牛車を率ひ来りゑれゑ乗れと云ふの形ちを示す然らバ之れゑ乗れバ宜しひと手合ひ摸合ひを以て尋ねけれど唯ゑ點頭して

遥より西南の方を指ざしける故より左それぞ其の地方
よこそ或ハ御墓の在さならんと想察せしうぞ兎も
角試みよ行く可しと卒然なぞら其の車より乗れバ主
人其の丁夫より向ふて遥ゝ西南の方を指ざし何ふや
ら云ひ付けたれぞ丁夫も了義せし形ちまて我等を
引ひて陋巷の外ゝふ出て行く實より如何んとも云ふ
可ゝらざる漠然の至りそゞし是れより行くこと數
里よして野外を轉じて山手の方ゑ向ひんとする時
黒崎余より向ふて云く北畠君是れよりハ何所ゑ行く
ので有りまちやうさてハ徐々例の不足を鳴らし掛

けたりと察せし故より余恬然として云く御墓の方ゑ
行くのぞやと彼れ云く愈々御墓が分りましやう欤
余云く未だ分らぬのぞや彼れ云く分らぬでも悃り
入ると余云く分らぬ故より尋るのぞやと一論終り稍
やありて彼れ復さ云く凡そ御墓ゑて幾里計り有り
ましやう余云くさきをとよ今ハ獨逸英語の力らも
盡き果て丁夫よさゑも咨問を可き術ての死れぞ百
里あるやら二百里あるやら唯ゞ茫々として知るよ
由し死し嗟呼丈夫苟も行く可しと決したり千里萬
里も何んの辞をることゝ之れ有らんや氏其れ細論

さることなれと云ひつゝも益々山手の方を行く程
に午后第三時頃連山の麓に衝き出でたる一つの土
山の下に至りたり丁夫爰に於て牛車を止めて何に
やらチンプンカンと云ひつゝも手を振り回はして車
より下りよと云ふの形ちを為せる故に何に事やらん
と思ひつゝ車を下りけれど我れに從ひ来れと示せ
の体かれど唯ざ其の云ふまゝに是れ從ひ其の山の
上るに登れど豈に圖んや土山にて非ずして宛も周
圍二丁餘り有りつゝ可き大ひなる摺鉢の端の如き所
に立つたり然して其の底を見るに宛も塔の形ちに

似たる石造の建て物ありて近頃る土中より堀り出
せゝ者の如く尚ほ男女百二三十人計り土を堀り土
を荷ひ鞅掌絡繹たり余丁夫に問て云く之れ果して
何に物ぞや丁夫何にやら云へども更に分らざ故に
黒崎に向ふて云く兼て聞く所に由れど即今釋尊の
墳墓を堀りて居ると云ふ蓋し之れならん欤然し
墓にしては餘りに大ふれど亦た塔ならん欤何にせ
よ彼の多人數中にて或は英語の出来る者もあらん
兎も角行ひて咨問せられよと云へど黒崎即ち諾し
て直ちに石階（四十五六段も有る可し）を下り彼の群

中に入りて往々咨問せしうども更に分らぢ余端の上ゑに在りて呼んで云く黒崎果して如何ん黒崎の云く未だし余云く速うに勉旃よやと勵ましけれぢ彼れの飛回ること宛も發雷の如く稍やありて彼の小高き所に少し偉大ふる黒人(印度人を皆な黒人ふ)の種々指揮をるを見占て問訊しけれバ天幸にも彼の黒人い英語を自在に話せり即ち云く是れを斯れ釋尊の大墳墓ふりと是に於て黒崎手を舉て大呼して云く是れ即ち釋尊の大墳墓ふりと余之れを聞ひて宛も狂人の如く石階を兼下りて思ひぞも黒崎

を懐き抱ゑ跳て云く嗚呼大聖世尊の墳墓なり大聖世尊の墳墓なりと多日の千苦を打ち忘れて喜跳悦躍相ひ止まざれバ土人之れを周匝して太ぢ奇怪の看を為しまける也稍やありて黒長云く我れを即ち當修營所の奉行ふり先づ我ら修營小屋ふ来り玉ゑうしとのこと故に取り敢ゑず其の小屋に誘れて狂氣漸く清整端正なりさて此の所いもと加耶の聯地ふして佛陀加耶と名くと加耶の里よりも十二三里も有りと云ふ也

黒長我々に向ふて君等い何れの邦の人ふして何ん

の為めなる爰ゑい来りしぞと問ひ給へり故に前日に鋼
買の「アデレッフエ」及び比拿力の「バ子ルゼー」氏等に
答ゑ一如く陳しけれと黒長大いに感喜いたされて
云く然らば君等は日本人にして我が釋迦教を信奉
せるの人なる歟我れは即ち「ダークベンゴ」と云ふ者
にして此の大墳修營の奉行を命(印度政府より)ぜら
れし者なれば之れに關せし事ゑれを渾て配慮し参
らす可し何んぞうとも托せられうしと懇に云ひ呉
れける故に我れ等も深く陳謝し然らば何にをとも
うく先づ釋尊の大墳に詣せ令め玉ふれよと云へば

然らば我れ自ら指切せ可し来り玉ふうしと云ふれ
し故に余即ち法衣を着し經卷を持して大墳の前に
至れば大墳峩然として其の高さ宛も八丈餘其の周
圍十餘丈も有る可しと思ふる實に世界无比の大墳
と云ふ可き也(余曾て佛蘭西に於て拿破倫の墓を見
る人皆な云く世界第一なりと今此の大墳に比せる
に其の細小なる論ぞるに足らざる也嗚呼釋尊威德
の巍大ゑる推て知る可きゑり)廼ち其の墳戸より凡
そ一丈七八尺計り奥に入るに其の奥中太ぞ暗淡模
糊たり然るに其の正面に三尺四五寸許りの黄金の

釋尊を坐し其の下たよ圍大なる穴を鐵の圓板を以て蓋ふて有り云く此の内よ釋尊の金棺を收むと之れを聞き余蹙然として立ち泫然として泣て拜して云く嗚呼我き等六十年来徒ら佛尊の威名を聞き今日爰よ来りて此の親容を拜き我き等感喜の至り且つ極まる豈よ車載斗量き可んや即ち彌陀經一卷を展誦し深く大育の荷恩を敬謝し奉りつ

年を經て名のみ殘りし加耶の里よ
今日みわとけの痕と問ふ哉

と扯撰らぬ卑言を陳みたり此の中ゥ名のみ殘ると

云ふて前日ゥ云ふゲ如く古昔し釋尊在存の時の山川國都の名（サンスクリットの名）を以て何よを云ふても少しゥ解らぢ（今ハ都て「パリー」の名よ變りし故よ）衰頽せしと云へどゥ加耶だけを今尚ゥ其の古名を存をろが故よ名のみ殘ると云ふ也此の名が我々の此の偵尋の原引となりし也其れより左の方よハ南門右の方よを各國天子（「スペリヤ」「ペルシヤ」等）の建呈されし碑石（三行よなりて十五ヶ所あり之れを寫眞中よを死き也）等を點見し畢り（之きを今爰よ一々乘記をろよ遑まあらざれど聞んと欲をる者を来れ）

先づ「ダークベンゴ」氏の小屋を引き取り日も西山に
呑きけれど明日復た来る可しと約し今日は夜をこ
めて加耶の里まで立ち帰りたり主人も大に歎ち詫
びし体なりし所その配慮に由り正しく佛尊の大墳
を拜せしことを種々形容して深く其の厚意を謝し
遂に納屋の内に臥したりけり其の大墳の槃形は
寫真を爰に粉して劉覽に附せ其の中に第一圖は五
年以前に堀り出せし儘なり其の第二圖は五年以後
修營の形ちも委詳は他日辨ぜ可きも
翌五日は天氣牢晴にして再さび佛陀加耶に行く可し

とて昨日の如く牛車と云へど主人も既に暗記して
直ちに車を率ひ来り即ち之れに乗りて加耶の里を
ぞ出でたり今日は昨日に打て變り生路も即ち熟
路と成り主丁の間も亦と知り合ひければ路も意外
に増さに采りて第十二時頃に大墳の下とまで達し
たり黒長「ダークベンゴ」氏も太ぎ歎ち詫びてぞ居ら
れたり

「ダークベンゴ」氏大墳痙堀の槃話

余「ダークベンゴ」氏に向ふて此の佛尊の大墳は即今
堀り出したと云ふは真なる欤此のこと若し真なら

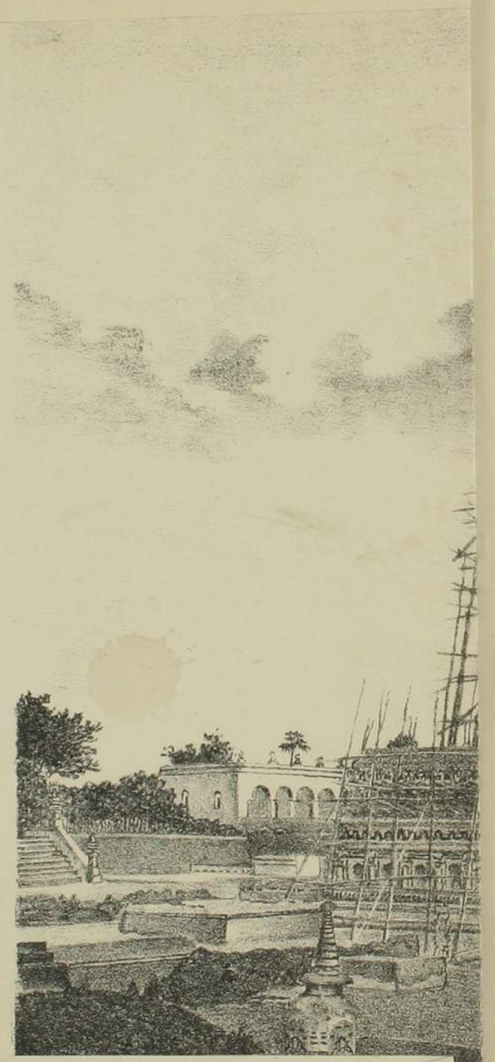
を何つの頃何んの由るを以て埋められしやと尋ね
けれど氏云〳〵されバとよ此の大墳を堀り掛けしも
二十年前のことなれども正〳〵堀り出しさるハ五
年以前のことも然るよ其の埋められしも今より千
九百七八十年のことよりて其の呼以ん如何んとな
れバ「サキヤモニー」(釋迦)教徒と「ブラマ」教徒の間だよ
於て法義上の諍論を起し(此の話金七十論三十述記
因明大疏等の説と合して益々徴そるよ足る也)兩派
互よ陵轢の末ゑ遂よ印度全部の戰となる釋迦徒の
敗績壞散せしとき「ブラマ」徒の来りて此の大墳を粉

碎せんとするよ餘り大墳の堅牢なるが故よ卒然之
れを痙埋して去りしと也此の時よ中りてや一二人
の力ら之れを補援そる有(此の話亦さ三十述記の説
よ合せ)りと云へども之れを挽回そること能ゑず遂
よ今日の如く陵夷漸廢そるよ至れる也然るよ今よ
り二十年前英國天子「ミトロギー」(古物を存保そる學
文なる)學の意よ由りて命を印度政府よ下して此の
大舉あるよ至る是れ即ち此の大墳の瘞堀そる呼以
んの槩數なりと云云此の話前日よ比拿力府の「バ子
ルゼー」氏の話と亦さ全く同一なり我が佛尊の大教を

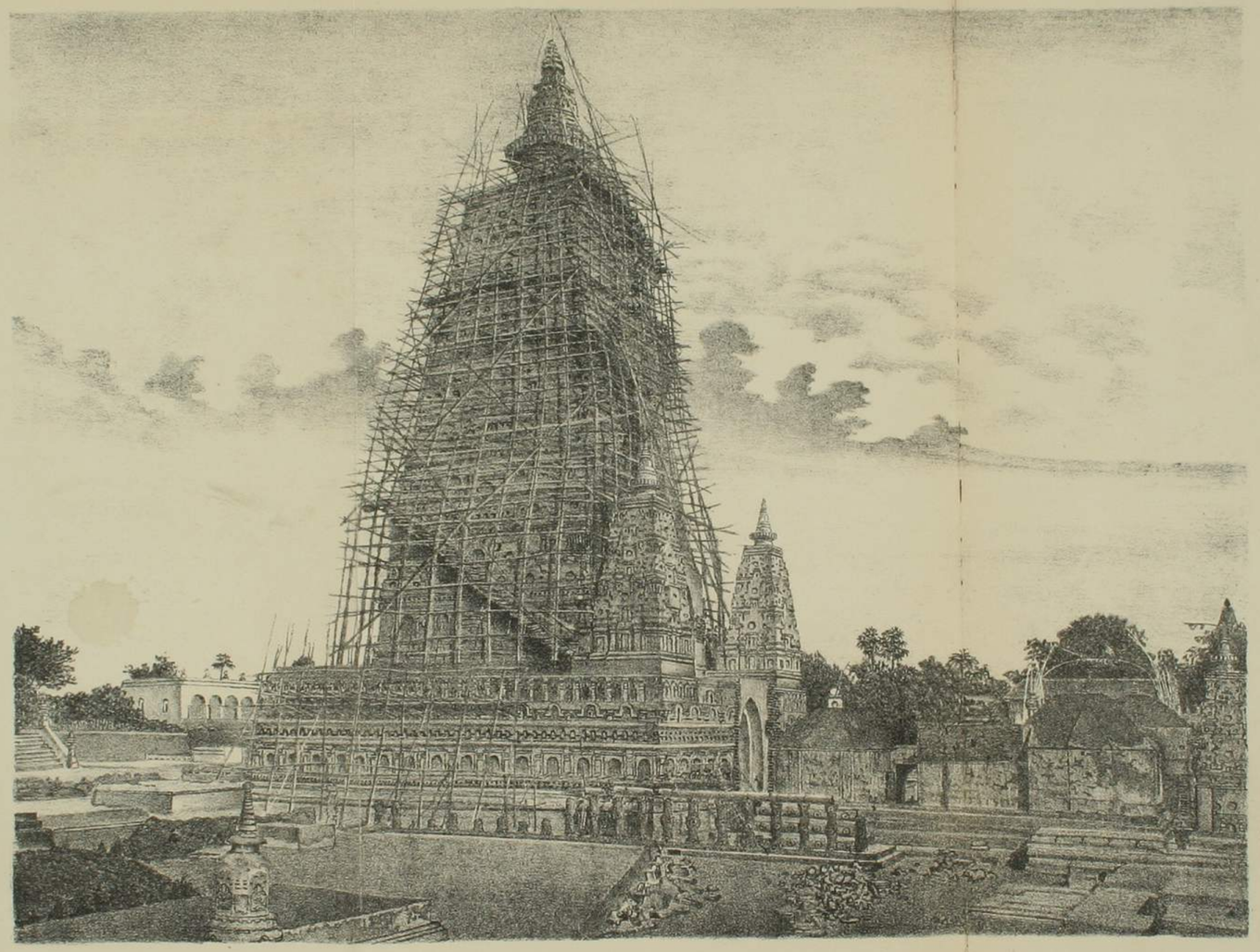
遵奉せる者果して之れを何ぼとう思ひ玉ふぞや

大墳の所在を人の知らざりし所由

余「ダークベンゴ」氏ハ言て云く我れ此の大墳を弔問の為めよて頗る若干の勞苦を嘗めとり我れ曾て歐洲在留中獨逸の「サンスクリット、プロフエッシヨル、オルデンブルヒ」魯西亞の同く「プロフエッシヨル、ペトベーフバトリッチエ」(各々印度ハ在學せること多年と云ふ也)及び英國の同く「プロフエッシヨル、マクスミルレル」氏(此の人ハ印度學ハ從事せること數十年と云ふ也)等ハ就て此の大墳の所在を質問せしハ



當圖ハ道龍師自ラ天竺ヨリ持來ラル、所ニシテ生謹テ之ヲ親寫ス　三云



當圖ハ道龍師自ラ天竺ヨリ持來ラル、所ニシテ生譯テ之ヲ親寫ス　壬ゑ堂緑山

此ノ書中ニ箱入スル所ノ當圖ハ餘リ大相ニ付キ寫真
權ヲ願ヒ別ニ縮圖ニ致シ所望ノ人々ニ附與ス可シ

皆な云く我れ等在印中佛墓の所在ヨ付てい種々之れを捜索せーゥども少ーも之れを知るふ由ーヶ元ゥりーも也嗟呼物換り星移りて二千五六百年来の今日多くハ消亡碎滅せーならんと云ふ也其の上ゑ前日ヨ西印度ヨ来り鋼買の「アデレッフ工」及び比拿力の「バ子ルゼー」氏(各々印度中の識者)等ヨ咨問せーヨ亦ヨ皆な云く我れ等印度ヨ捜息をること殆んど六十年未ざ其の大墳の所在を聞知せぢ蓋ー消亡碎滅せーならん歟と嗟呼此の如き有名なる大墳ふーて他邦人の之れを知らざるハ且く措く今土人ふーて之れを

知らざる者い我れ太だ疑惑を耐ゑざる也氏其を之れを如何んとゃ思ゑるやと云ゑを「ダークベンゴ」氏云くさきをとを其を土人ふして尚ゃ之れを知らざりし所以んの者其の所由二つ有り其の一つい久しく瘞埋中を没をるゞ故を知きず是れ一つも其の一つと土人の為めを塗抹されし故を知れぞ是を一つ也此の二つの所由を以ての故を土人尚ゃ之れを知らぞ況や他邦の人を於てをや然るを其の瘞埋中を没をるゞ故をと云ふ者い辨を埃たぞと云へども其の土人の為めを塗抹さるゝゞ故をと云ふ者如何んとなれバ抑も此の大墳を埋没をる殆んど其の全体を埋めて塵を其の小尖を顕を而已然るを此の佛陀加耶村ハ即今民居二十七八戸を過ぎぞと云へども太ぞ古村ふして村民(口碑)恒を云く大聖佛尊の大墳ハ即ち我ゞ村を在り上古大戰(佛徒と「ブラマ」徒の戰ひ也)の時賊の為めを埋没さきて今尚ゃ塵を其の小尖を出して彼の土山の上ゑを在り是れ即ち我れ等祖先来云ひ傳ふる所の確説なりと然るを其の輪村の人民等皆な之れを打ち消して云く彼を云く大聖佛尊の墳墓ハ我ゞ村中を在りと何んぞ自ら驕ること

との太だ甚しきや其の小尖の如き者ハ必竟ゞて他の古碑の存をる而已と是れよ由りてや適々十里二十里外の人々其の輪村の人よ逢ふごとよ問ふて云く佛陀加耶村よを大聖世尊の墳墓有りと果して真なる欤即ち輪人等皆な云く其れを是れ佛陀加耶村民の私言ふ〳〵て實よ采るよ足らざる妄説なれど敢て惑ふこと勿れと塗抹されたり是よ於て十里二十里外の人民尚不此の塗抹の為めよ誤まらる況や百里二百里外の遠人及び印度全國の人民よ於てをや是き即ち我ゞ大墳の久〳〵く埋もれて知もざる所以ん也然るよ今より二十年前英國の天子佛陀加耶人民の口碑よ基き印度政府よ命ゞて試よ之れを堀ら令めたり此の間だよ於て種々事情之れ有りと云へども遂よ五年前此の大墳を見發せり然るよ印度ハ邈たる大國なをバ尚不未ざ悉くハ之れを知らざる也是れ即ち師の偵尋をる特よ勞苦せられ〳〵所以ん也

龍云〳〵是れよ由て之れを云へバ支那歴代の三藏等の天竺よ入るも未だ此の佛尊の真墳よ拜詣せ〳〵者ハ蓋〳〵一人も之れ非ざる欤然るよ我も之れを發見

をるの今日ふ中りて直ちに拜詣をることを得る者い實に千歳の一遇と云ふ可き哉

大墳の右側に龍が碑文を建る話

余「ダークベンゴ」氏に請ふて云く我れ爰に來りて此の大墳に詣をることハ我が日本建國以來の大初なれど庶幾くハ此の時日を石に勒し之れを大墳の側に建てゝ日本人も亦こゝ來至せることを全地球上の人に示めさんと欲を氏其れ之れを許をや否や氏云く我れ將に他日之れを政府に云ふ可し師其れ之をを建てゝ君の清操を千歳不朽に示めし玉ふゝとて

日本開闢來
余始詣于
釈尊墓前

明治十六年
十二月四日

道龍

る建て、日本人も亦之來至せることを全地球上の
人に示めさんと欲せ氏其れ之れを許せや否や氏云く
我れ將に他日之れを政府に云ふ可し師其れ之を
建て、君の清操を千歳不朽に示めし玉ふべしとて

幸ひ六尺有餘の堅石を附與されける故ゑ左の小文を記〜たり（即今大墳の修營ゑ付石工の爰ゑ在るを以て彫事幸ゑ速成せり）

日本開闢以來余始詣于釋尊之墓前明治十六年十二月四日道龍

右ぎ碑石ハ佛尊大墳の右側ゑ建てたれゞ他日我が日本人の重ねて行く者あらバ幸ゑ一覽せよ即ち其の該圖を今爰ゑ総示も（是きハ印度の白布を以て其の碑面を覆ひ余自らゝきを摸寫〜さる者なり）

「ダークベンゴ」氏より大墳の寫真を附與せらるゝの

話

右ぎ碑石等のことは付き日々加耶より爰は来往せしゞ先づ碑石も之れを樹立いさゝ且つ大墳墓の事歴等も其の槩數は之れを了知したれど此の上ゑた何卒ぞ大墳墓の全形を寫真は采り携ゑ帰りて人々は示そならバ其の欣喜必ず若干ならんと思ふ故は「ダークベンゴ」氏は此のことを委く縷陳して依頼せしゝぞ氏云く之れを寫そことと別は差支ハ之き无しと云へども此の地も此の如き草茫さる田舎のことなきぞ寫真師などハ一人も有ること无し若し之

きを招ゝんとそるときハ數百里の外ゝ「ベンキボール」は至りて之れを覓む可し然らバ則ち聊爾のことは非ざる也如ゝぞ師且く竢て庶幾くハ師の國土番地を我れは記附せられよ他日營事終らぞ我れ（ダークベンゴ」氏自ら寫真を能くを故は云ふこと然り）自ら之れを繕寫して必ず若干葉を送致を可しと余云く氏の芳意辱きを則ち辱しと云へども所謂る遠水不救近火（貞觀政要の言）とて遠方の水を近所の火事を救ふ能はざるの類ひはして他日の若干葉ハ今日一葉の感憤を與ふるの速ゝかるは如ゝされぞ仰ぎ

願くハ氏我が為めに一葉の親寫を勞せよと云ハバ氏云く師の非常の渇望なれど如何んとも為を可きなれども其の技藝（寫真藝ハ今日氏の手許に无し故に然り云ふ）を得るとても同く之れを「ベンキボール」に覓む可きなれど是れ亦さ聊爾のことに非ざる也既に五年前のことなりしが我れ自ら十葉の寫真を米り其の二葉ハ此の大墳の戸上に掲示し其の他ハ英國天子（二葉）印度政府（二葉）某れ皇族（二葉）を差出し残る二葉い我を自ら之を所藏せり今師渇望の太だ甚しき我が所藏を呈ぞ可しー一兩日埃ち玉ゑ米り調べ參らを可しとのこと故余爵然として云く氏若し其の鐘愛を既ハバ實に敬戴の至り也幾日よても埃つ可しとて此の日ハ亦さ加耶の里ゑぞ歸りける

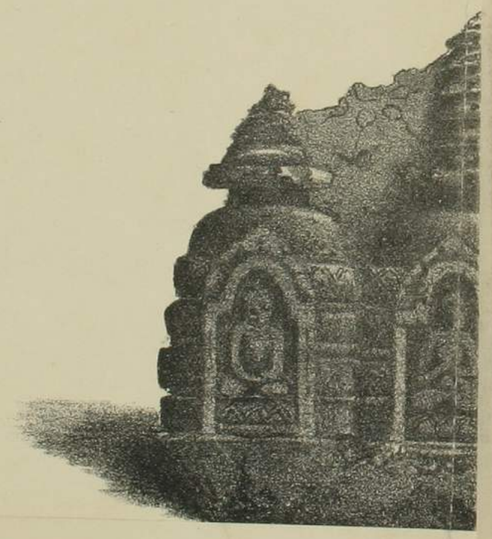
さて三日の後ち「ダークベンゴ」氏其の藏そる所の寫真二葉を附與されさり（今爰に粮示そる所の者即ち是をなり）是に於て余之れを大謝して云く是を此の二葉を豈に唯ざ隨珠（隨侯の珠）和璧（和氏の璧）のみならんや我が三千八百萬人の大墳坐拜の嘉貺實に敬荷の至に耐ゑざる也

右ぎ二圖の中の第一圖ハ五年前初めて堀り出しさ

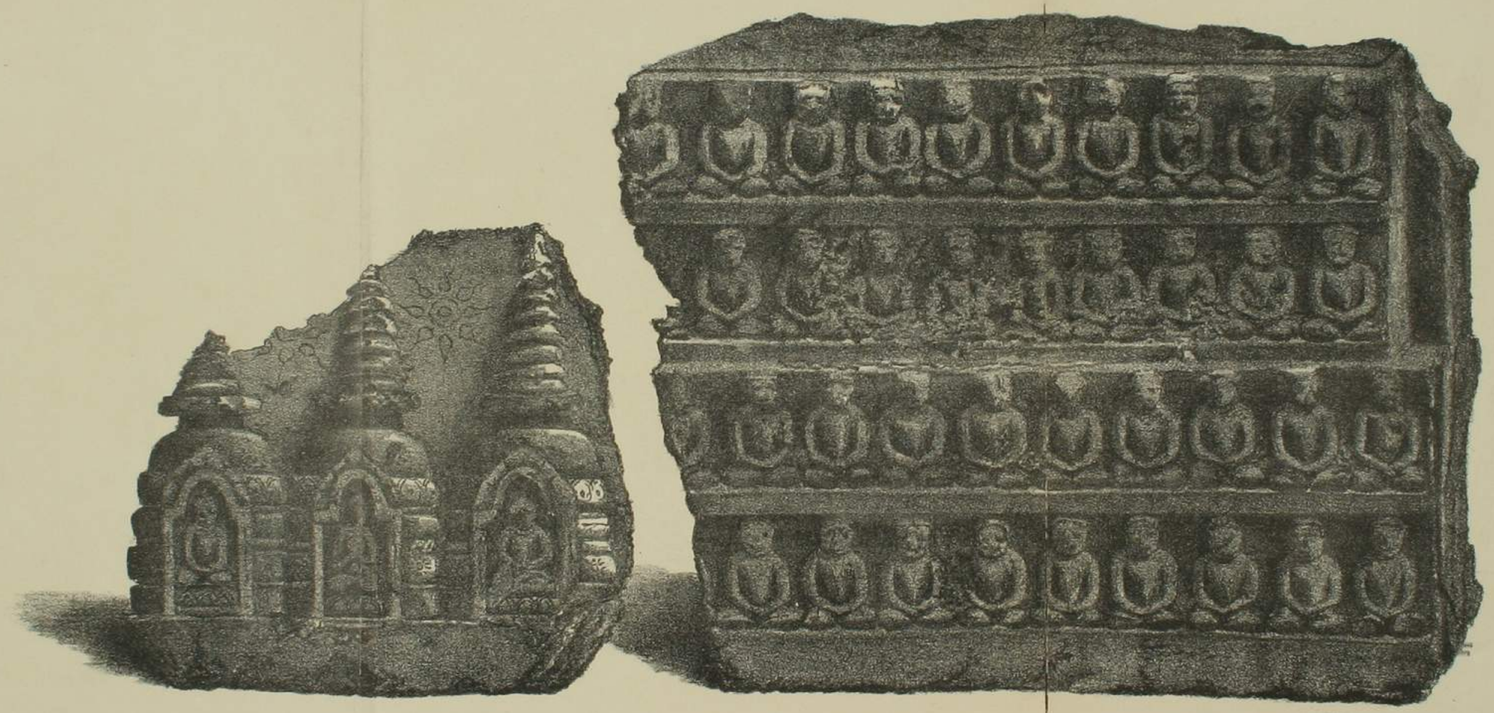
る所の者よりて其の第二圖と五年以後よ修營せる所の者也

大墳の石片を奉持して歸朝せるの話

頃日來碑文及び寫真のことよ付き日々鞅掌中よ修營小屋の側らを眄顧せるよ墳墓の石片堆をなし最とも嚴重よ之れを保護せる有り一日余其の内よ入り一片の石を采りて「ダークベンゴ」氏よ言つて云く庶幾くハ此の一片を貺そんことを氏莞爾ふて云く師何んぞ荐りよ覔むることの豪氣ふる其きハ契りませぬと余亦さ笑ふて云く凡そ物を覔る豪氣よ非



當石ハ二箇共ニ釋尊墳墓ノ石片ニシテ同シク師ノ持來ラル、所ノモノナリ生



此ノ書中ニ箱入スル所ノ當圖ハ餘リ大相ニ付キ寫真
權ヲ願ヒ別ニ縮圖ニ致シ所望ノ人々ニ附與ス可シ

當石ハ二箇共ニ縛ノ尊墳墓ノ石片ニシテ同シク師ノ持來ラル、所ノモノナリ生謹テ之ヲ親寫ス

玄々堂松田緑山

り一片の石を采りて「ダークベンゴ」氏ま言つて云く
庶幾くハ此の一片を貺ゑんことを氏莞爾ふて云く
師何んぞ荐りま覓むることの豪氣ある其きハ契り
ませぬと余亦さ笑ふて云し凡そ物を覓る豪氣ま非

らぎんで其の大欲を果さこと能はざれば也氏其れ之を貶る氏云く今余が契らぬと云ふ者い敢て「タークベンゴ」が私言に非ざる也一い即ち政府の猥り濫伜を可らざるの命有り一い修營の秩序に由りて其の罅漏を補苴を可きを以て也と余云く氏の云ふ所の者も小理に由る我が覓むる所の者い大理ふ由る也必竟ドて大小の分ある而已我も他日云ふ可し氏其れ少しく考る玉ふらしとて此の日も亦と加耶の里ゑぞ歸りけり

一日余ダークベンゴ」氏に言つて云く此の田も氏の

懇助は由りて我が調査の事都て完全せることを得たり由りて我れ將さは別を成さんとす實は懇々の至りは耐ゑざる也之れは就き前きの石のことは付て今一應理の大小を陳せんとて其の采不を君の意は任せ可き而已凡そ事物の間ざは於て小理を知りて大理を知らざる者を細人曲士の為を呼とせる也又さ大理は由りても小理とも屑とせざる者を大人豪傑の為を呼とせる也然るは今氏の云ふ所の者を小理はして其の大理の如きを太ざ未ざし也如何んとなれば今氏若し我が云ふ所を許さを所謂る一葉の墜落は由りて天下の秋を知ると云ふこと有りて石も壁は是れ片小と云へども之れは由りて以て我が大墳全体の寶石と其の古色とを全了し益々其の信然(三千八百萬人の)せる所ありて合せて曩は貺ふ所の寫真の尊嚴を大成せるなり是は於て初めて氏の大貺を全ふせと云ふ可き也氏其れ壁は其の小片を惜んで其の大体を捨ること勿れ我れは亦さ豪氣を以て之れを覓むるは非ざ必竟して之れを覓むる所以んの理を盡せ而已と云へを氏大ひは笑ふて云く我れは即ち大悟せる所あり師其れ其の石片を持ち行

け我れ即ち處をる所ある可き也然し歸途必ず人よ
咎めらるゝこと勿れと是よ於て此の大小の二片石
を領受し得たる也其の形ちも今爰よ粭示をる者即
ち是也
以上墳墓の槩状此の如し其の詳細のことも他日續
編を製して示す可き也
是よ於て本月十一日午後第二時「ダークベンゴ」氏よ
別れを告げ翌十二日加耶の主人よも留中の懇到を
謝して午前第十時加耶を發して「バンクボート」の方ゑ
向ひける此の間ハ「ダークベンゴ」氏の教ゑよ由りて

大ひよ便路を得たれむ路次の勞苦も无ゝりけり午
後第六時「バンクボート」よ至着せり今夜も取り敢ず
爰よ一泊をる也
翌十三日午前第七時同所より艙車よ乗り午後第八
時東天竺の甲谷陀の港よ着し「ミニヤポッフイス、ス
トレート」と云ふ街の「バンマダライ」(第三番地)よ投宿
せり爰よ止ること六日間日々「プロキーン」と云ふ印
度の駕よ乗りて府中を點見せし也此の甲谷陀ハ人
民凡そ一百萬餘口有りと云ふ也然し人情の菲薄ゑ
る蓋し世界第一と想ふる其の一を云へバ十「ロピー

の物を二「ロピー」半或い三「ロピー」位よまでいまける也其の他ハ推て知る可し此の甲谷陀の港ハ付き種々の事状ありと云へども餘紙无けれど續編ハ送る也

二十日午前第四時「ペオコンパニー」艦ハ乗ゞて甲谷陀の港を發を即ち此の河線を「ホグレ」河と名けて鉛絶斯(恒河)の派流なり初め河巾二三丁より起りて五丁十丁遂ハ十里餘ハ及んで四方の眺望天水茫々たり又さ鉛絶斯河ハ是れより北藍古の方ゑ流れて此の河よりハ更ハ大なりと云ふ也此の河を見るハ附けて

も印度の大國たることを知るハ足る也豈ハ獨逸の「ヱルメ」や魯西亞の「子ブカ」や墺斯土利の「ドノア」河等の類ひならんや即ち甲谷陀の港より二晝夜を經て漸く河口を放れて全く旁葛剌(東印度洋)ハ出でたり」其れより二十七日午後第十時「サイム」の「ピーナン」の港ハ着し是れより二十九日午前第九時新和蘭港ハ着し再び歐洲通航の大路ハ出でゝ是れより暹羅及び支那を經て无事ハ歸朝を致したり

北畠道龍師 天竺行路次所見卷三 畢

北畠道龍師著述目録

近畿之部

因明入正理論與便　三卷 既刻

因明新指　三卷

此書ハ精神學物理學議事裁判等ノ實地ニ就ク此因明ノ論方ヲ實用シ以テ世ノ識者ヲ佐ケントスルナリ

法界獨斷　一卷

世界宗教之興廢　三卷

天竺行路次所見　三卷 既刻

此ノ書ハ師各國ヲ巡回シテ遂ニ印度ニ入ルノ路次見ル所ノ天子政府宗教人民ノ實況ヲ來載スル者ニシテ其ノ名山大川春花秋葉ノ笑墜等ノ如キハ敢テ記スルニ遑アラスト云フ

六字名義　二卷
此ノ書ハ佛教神道基督三宗ノ佛神ノ同異ヲ弁シ遂ニ人間生死ノ一往一來タル本理ヲ説明スル者ナリ

真宗真要　前編 後編 四卷
此ノ書ハ師自カラ以テ立ツ所ノ宗教ノ本真ヲ示ス者ナリ

政治宗教對係之真理　前後 六卷

宗教憲法之相係　二卷

宗教兩院之相係　二卷

宗教文部之相係　二卷

宗教文明之相係　二卷

教育二方之本理　一卷

追發之部

宗教歷史　廿五卷
此ノ書初ノ十五卷ハ亜細亜宗教ノ史ニシテ后ノ十卷ハ歐洲宗教ノ史ナリト云フ

獨英墺佛小學校同異辨　一卷

宗教幼稚院義　一卷

宗教啞盲院義　一卷

宗教女學校義　一卷

陸海軍宗教必要　二卷

宗教刑場相係　二卷

印度「ヒロソヒー」辨　三卷

華天二教之裁決　二巻
唯識論新指　十巻

以上ノ著作ハ師ノ案巳ニ定マル所ノ者ニシテ即今我邦ノ為メニ日夜勵勉起艸シ居ラルヽハ追々發行之レアルベシ

明治十八年三月十九日版權免許
同　十九年七月　出版

定價金壱円八十錢

著述人　和歌山縣士族　北畠道龍
東京牛込區白銀町廿八番地寄留
出版人　同　北畠孝夫
東京牛込區白銀町廿八番地寄留
出版所　荒浪平治郎
東京牛込區白銀町廿八番地寄留
大賣捌　東京馬喰町二丁目　島村利助
同南傳馬町壱丁目　吉川半七

東京淡路町　巖々堂
同雉子町　團々社支店
同本郷春木町三丁目　島村利助支店

捌

同日本橋區呉服町　野口愛
同三十間堀　九春堂
大坂備後町四丁目　山村彦助　東京柳原通り　田中増蔵
同心斎橋筋　松村九兵衛　同銀座四丁目　博聞社
同本町四丁目　岡島真七　名古屋玉屋町　片野東四郎
同備後町四丁目　梅原亀七　静岡江川町　廣瀬市藏
西京二條通り　若林茂助　同呉服町　青木榮次郎

同東洞院三條上ル　村上勘兵衛　同新通壱丁目　勝見儀助
同御幸町姉小路上ル　藤井孫兵衛　甲斐甲府　成島治平
同河原町通二條下　大黒屋書舗　甲府常盤町　内藤傳右衛門
同寺町四條上ル　田中治兵衛　信州長野元善町　西澤喜太郎
岐阜米屋町　三浦源助　同松本南深志町　髙見甚左衛門
埼玉縣鴻巣駅　長島為一郎　肥後熊本新二丁目　長崎次郎
茨木縣水戸上市泉町　川又銀藏　藝州廣島　早靈社
越後長岡　佐藤作平　肥前佐賀　西村萬次郎
同同　目黒十郎　阿波徳島　坂井萬吉
同新浮古町通　井筒駒吉　出雲松江　川岡清助

加賀金沢尾張町　牧野作平　芸藝劣廣島　藤井孫兵衛
同金沢　近田太平　和歌山湊野町　野田大次郎
越中富山田町　守川吉兵衛　東海道濱松　白木鍵次郎
羽前鶴岡　小池藤次郎　参劣豊橋　豊川堂
羽後秋田　岡田治助　東海道藤枝宿　杉山英太郎
仙臺大町　木村文助
羽前米沢　中村清兵衛
羽後秋田大町三丁目　本間金之助
陸中盛岡中ノ橋通り　澤田正助
羽前山形七日町　五十嵐太右門